
現代怪奇異聞録

大城秀一郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

現代怪奇異聞録

【Nコード】

N4305B

【作者名】

大城秀一郎

【あらすじ】

現代に溢れる様々な怪奇話の短編集。その話ごとに、それぞれ別の主人公、そして別の話。そのどれも共通するのは、それが怪奇な話であると言う事だけ。

部室の幽霊の話（前書き）

ホラー初挑戦です。

これをホラーと分類するのかどうか不明ですが、もっと怖い話は後ほど。

部室の幽霊の話

何を隠そう僕には昔から靈感があつた。

厳密に言えば幽霊が見える。

だからと言ってそれを人に言つて自慢しようとか思つた事は無い、それが凄いい事だとか、そういう考えはまったく無かつた。

幽霊は見える。

色々な所で見かける。

家の中では滅多に見かけることは無い、良く見かけるのは墓場でも何でも無い、普通の街中である。

死亡事故が有つた直後の場所に行くと、はつきりとした物が見える。

大抵は五体満足な姿じゃない、脳漿（のうじょう）を撒き散らしているのを最初に見た時はその日の食事は満足に摂れなかつたが、その内に慣れた、人間の慣れとは本当に恐ろしい物だ。

いつも幽霊は何かを言っている。

だが、それだけだ。

何を言っているのかいつもはつきりとは聞き取れないし、昨日見えた場所に今日も見えろとは限らない。

それに幽霊に触れないし、向こうから何かちよっかいを受けた事も無かつた。

幽霊という言葉自体がどうなのかと思う。

人の意思が死ぬ寸前に、現世に焼き付けた生命の残りカスというか、残留思念の事を幽霊というのかもしれないと、自分なりの推測を立てて見たのだけれども、それを検証する術は思いつかない。

それにどうでも良いと思つている。

子供の頃は幽霊を見ると、親にそれを知らせたものだが、親はいつも笑つて真剣に取り合つてくれなかつた。

友達には言った事が無い、仲間外れにされるのが怖かったからだ。子供の頃からずっと、僕は幽霊が見えても見えないフリを続けていた。

実際問題、見えて驚かされた事は有っても、得した事は一回も無かった。

高校生になった僕は、どの部活にも入るつもりは無かったけれど、部活に入らない生徒からも部活の運営費を徴収しているのだから、自分で払っているお金の分くらいは自分達で使わないか？ という教師にあるまじき誘い文句に惹かれて、映画研究部に入部したのだった。

それに今後、就職にしても進学にしても、部活に入っているのではないのでは印象が違う、それも理由と言えば理由だった。

部員は同じ学年の顔見知りが6人だけ。

僕達が入らなければ、部が無くなっていたのは間違いない。

映画研究部とは名ばかりで、部の活動費でビデオ借りてきたり、映画を見に行ったり、文化祭には映画をずっと流しっぱなしだったりとか、やる気はほとんどない部活だった。

活動自体も気が向いたらで、少ない時は月に2回しか集まらない時もあった。

学校は新校舎と旧校舎があつて、映画研究部などの人数の少ない部活が活動する部屋は、旧校舎に有った。

陰気臭い旧校舎は、あちこちにガタが来ていて、さすがに崩れたりはしないが蟬^{セミ}が目立っていた、来年には取り壊される予定らしい。いつも決まって映画研究部が活動しているのは旧校舎の、第一コンピュータルームだった。

コンピュータルームと言うと聞こえは良いが、本来そこに有るはずの40台近いパソコンは既に新校舎に移されており、そこには何も残されていない、一般的な家庭に置いてあるテレビより少し大きめのテレビが置いてあるだけだ、それでいつも借りてきた映画を

見て、一応感想を形だけ話し合うのがいつもの活動だった。

その第一コンピュータールームで、僕はいつもその幽霊を見かけていた。

女の子の幽霊だった。

年齢は僕達と変わらないように見える、この学校の生徒だったのはその服装から分かる。

いつ行っても、その部屋に居る、もつとも部活動以外ではその部屋には入った事は無かったけれど。

部屋の隅に蹲るようにして、それでも視線だけはずっとこっちを見て、他の幽霊のように何かを呟いているのだ。

相変わらず何を言っているのか聞き取れないが、僕はその幽霊に珍しく興味を抱いた。

成仏という言葉は適切ではないが、何故消えないのか疑問に感じたのだ。

事故現場でも、1週間もすれば見えていた幽霊は消える、それなのに映画研究部が活動し始めてから最初の活動で見かけて、それから半年はずっと眼にしている。

これは一体どう言う事なのだろうか。

友達と他愛ない話を部室でしている時も、視線はその彼女に向いている時があった、そのせいで「お前どこ見てんだよ」とか言われる事はあったが、幽霊の話は一切しなかった。

顧問の岩本先生ならば、この部室に見える幽霊について何か知っているかもしれない、そう考えて僕は職員室ではなく、新校舎の現国準備室という部屋にいつもいる岩本先生を尋ねた、先生の担当は現代国語なのだ。

「先生、すみません。ちょっと聞きたいんですけど」

滅多に話しかけない僕の突然の訪問に少し驚きながらも、

「おう、どうした？」

気さくに対応した。

先生は30代の後半で、もう十年以上もこの学校にいる古株だった。

新人で赴任してから、一度も他の学校に移った事が無いのだ。明るい雰囲気^{ウケ}で、生徒の評判も良い。

「第一コンピュータールームなんですけど……、あそこって昔何か有りました？」

「何かって？」

「いや……、えと……、その……」

殺人事件とか、とは聞き辛い。

だが、部屋に幽霊が見えると言う事は間違いなくそうなのだ、いやいや、部屋で体調を崩してそのまま命を失ったという場合もあるか。

先生に聞くよりも、自分でネットなどでそういう話を探せばよかったと、僕は後悔していた。

「すいません、何でもないです」

僕は頭を下げて部屋を出ようとした。

その時。

「知っているのか？」

先生に唐突に問われた。

普段の気さくな先生の言葉とは違って、何か響きと雰囲気が冷たいような気がした。

突然の事で、その質問が何を知っているのかと言っているのか良く分からずに反射的に僕は。

「知っています」

そう言っていた。

「そうか……」

先生はそう呟くと、煙草に火をつけた。

「彼女とは何も無かったんだ」

先生のその言葉の意味が、僕は理解できなかった。

先生には幽霊が見えるはずがない、では何の話をしているのだろうか。

あ。

あの幽霊は、先生の関係者と言う事なのか？

まさか

と僕は思った。

もしかして、あの部室で彼女を殺したのは先生？

そうだとしたらこの部屋で二人つきり、僕は先生を脅迫しているような状況と言う事か？ そうだとしたら、口封じの危険だって……いやいやいや。

発想が、2時間サスペンスのノリだ、そういう事態に遭遇する訳ないじゃないか。

でも

先生は言葉を続ける。

「俺がこの学校を離れない理由はそれだよ、彼女との事が有って他の学校じゃ受け入れて貰えなくてね、もっともクビにならないだけありがたいのかもしれないけどね」

その口調は、犯人が隠し続けてきた犯罪の事を話す口調ではなかった。

「すいません、先生。僕、あの……、実は詳しい事知らないんです」

僕は正直にそう言った。

「なんだ、昔の新聞でも見て知ったのかと思ったぞ」

「新聞に載った事が有るんですか？」

「ああ、新任若手教師、生徒と密愛。生徒は思い余り自殺、そんな内容の話がね」

僕は一瞬言葉を失っていた。

先生は言葉を続けた。

もう自分で話を始めた手前、僕がその事件について大した知識が

無くとも、話しきろうと考えたのかもしれない。

そういう秘密は、誰かに言う事で気持ちが軽くなる、もちろんその話をする相手は多少は口が堅く、そして信頼できる人にだ、少なくともそういう相手として見られていた事を僕は少し嬉しく思った。

「よく相談には乗ってあげていたんだ、彼女は家庭に問題がある子でね、でも当時は若い男性教師が女生徒と放課後の一室で二人つきりで話し合う事が、他の連中からどう見えるか、考えた事が無かったんだ。若さのせい」と言えば聞こえは良いが、教師としては失格だ」

僅かに怒りが籠っているように感じた。

自分自身への怒りだろう。

「マスコミが来たんですか？」

「ああ来たよ、俺は停職になった、もつとも俺は否定し続けていたからね、何の非も無いのにクビになるのは嫌だったんだ、いや非が無いわけじゃないか……彼女の命を救えなかったんだから」

先生は悲しそうな瞳の色をしていた。

そんな眼をする大人を見たのは僕は初めてだった。

「もしかして、自殺した場所って……」

「今じゃ、第一コンピュータールームなんて名前になっているが、10年以上前は進路指導室だったんだ、あそこは、そこで彼女は手首を切った、彼女は電話をしてきた、手首を切った後にね、俺が駆けつけた時にはもう」

僕は、その後の話ははつきりとは覚えていなかった。

それだけ滅多に聞く機会の無い、重い話だったからだ。

もちろん誰にも言うつもりは無かった。

僕はその話の中で一つ感じたのは、少なくとも先生にその気は無くとも、彼女は先生に気が有ったのではないかと思った。

そして、彼女が命を絶ったのは、恐らくマスコミやら世間に追求されたからではなく、関係を否定し続ける想い人を見ての事じゃな

いかと思った。

多感な思春期の少女だ、発作的にそういう事をする可能性もある、しかも家庭に救いを求められない場合なら特にそうだ。

確証はどこにも無いがかなりの確率でそうだと思う。

だとしたら、彼女が未だに残り続けているのは先生に対する激しい恨みからなのか？

僕は現国準備室を後にして、そのまま第一コンピュータールームに向かった。

今まではどういう言葉も聞こうと思った事は無いが、今ならあの幽霊の言葉が今なら聞ける気がしたからだ。

いた。

いつもと同じ場所にいる。

僕はその幽霊の言葉に耳を傾けた。

幽霊の口元に耳を当てた。

言葉ははっきりと聞こえた。

その言葉は、恨み言でもなければ、僕を道連れにしたいとか、そういう類の言葉ではなかった。

『先生、愛しているわ、ずっとずっとずっとずっとずっと』

……』

そう言っていたのか。

なあんだ。

10年以上も色褪せず想い続けるその気持ちに、僕は感服していた。

彼女は来年取り壊されるこの校舎と共に消え去るだろう。

部室の幽霊の話（後書き）

短編です。

この話はこれでおしまいです。

オチがついているのかどうか、そここのところの判断はお任せします。

猫の話 1 (前書き)

短編と言っても3、4話は続くかもしれませんが。
ちゃんと怖い物を書けていれば良いんですが……

猫の話 1

猫についてどう思う？

猫を触った事が無くとも、街中で眼にした事が無い人はいないはずだ。

飼われていない動物の中では、カラスに次いで良く眼にする動物だからだ。

可愛い、汚い、怖い、どうでもいい……

様々な意見が出るだろう。

好きな人間は、野良猫にも平気で触るし、嫌いな人間は猫が道にいるだけでホウキを持って追い払うかもしれない。

この物語の主人公は、恐らく猫なのだろう。

3匹の猫だ。

1匹は黒猫。

1匹は白猫。

もう1匹は茶色と白の混じった毛をした猫。

物語の始まりはこの3匹の死から始まる。

あまだゆういち
天田優一はそれを見下ろしていた。

既に動かなくなっている3匹の猫達。

外傷は無い、だが何故死んだのかそれは見ればすぐ分かる。

猫達は口から皆、一様に吐瀉物としゃぶつを撒き散らしていたからだ。

これがもしも1匹だけならば、体調不良とか他にも理由が思いつくが、3匹も一緒となるとこれはもう、何か毒の類を飲まされたのは明白だった。

小学生である優一にとって、それはかなり衝撃的な光景であった。自分が可愛がっている猫達の死である、ショックを受けないはず

が無い。

その猫達は優一が飼っている訳ではない、空き地に住み着いているのを優一が見つけて、近寄るたびに何度か逃げられていたが、根気良く近寄り、そして仲良くなり今では優一が来ればその足元に駆け寄ってくるほど懐いた猫達だ。

優一が座つて、胡坐をかくと膝の上の特等席を競うように、3匹はその足に乗っかってくるのだった。

可愛かった。

家では事情により飼えないが、家で会えない寂しさはその場所です分に満たされていた。

猫達に餌をあげた事は無かった。

餌で手懐けるのは簡単だ。

だが、餌をやらないとすぐにその情は冷めるものだからだ。

それに、野良猫に餌をやると色々と言文句を言う大人も多い、だが優一は主義として、猫達に餌をあげたことは無かったのだ。

優一は主義として、猫達に餌をあげたことは無かったのだ。
優一の感覚からすれば、猫は飼っていると、養ってやっているという感覚ではなく、普通の友達として対等に接していた。

友達に毎回食事を奢らなければ一緒に遊べないようなら、それは本当の友達じゃない。

そう思っていたからだ。

本当の友達になりたかった。

人と猫という垣根など優一には大した物ではなかったのだ。

気が向いた時に、ふらりと行っても、猫達は喜んで優一の近くに走り寄ってくる、それが嬉しかった。

学校の友人に感じるものよりも深く濃い友情を感じていた。
その友達が、今は足元で冷たくなっている。

ピキ……

ピキ、ピキ……

天田少年の世界に、紛れもなく亀裂が走っていた。
決定的な亀裂が。

国木田くにきた小学校の5年2組。

時間は8時10分。ホームルームが始まるのが8時45分くらいだから、まだクラス全体に落ち着きが無い、まだ来ていない生徒もいれば、ランドセルと机においている最中の生徒もいる。

クラスのガキ大將的存在の高野真次たかのしんじは、子分の二人組の片割れの倉田力くらたつきと話をしていた。

「しかし、昨日は凄かったなあ」

高野の声は弾んでいるが、相手をしている倉田の口調は重い。

「でもさ、本当に良かったの……？」

倉田の言葉に、高野はムツとしたように睨んだ。

「何だよ、文句有るのかよ？」

その眼力は小学生にしてはかなりの迫力があつた。

同学年が相手ならば充分に威しとして成立する視線だつた。

高野は、小学校低学年から空手をやっていて体格も中学生に間違えられるほど立派だつた、それに一方の倉田は名前こそ強そうだが、貧弱でずる賢そうな風貌をしていた。

「だって……」

消え入りそうな声で倉田が、言葉を発している時、クラスの学級委員長であり、高野に唯一意見を言える存在の神代仁かみしろひとしが声を掛けた。

「真次、何の話をしているんだ？」

高野真次と神代仁は、お互いに小学校低学年から何度が衝突しているが、そのせいか今ではお互いに家に遊びに行くほど仲が良い、高野に怖がる他のクラスメイトとは全然違い、まるで怖がっていないのが友達になった理由かもしれない。

「よう仁。どうした？」

高野はとぼけたが、神代は倉田を凝視していた。

倉田にとつては高野も怖い、神代も怖い。

「僕じゃないよ、しんちゃんが」

思わず告げ口をするように、倉田は声をあげていた。

「は？ お前だつてスゲーって言つてたじゃんかよ、大体あれはお前の家の飯だぜ？」

「だつて……」

埒さとが明かないやり取りに神代は。

「だから何の話なんだよ」

と問い詰めた。

「天田の奴、俺らの言う事を聞かねーからさあ」

投げやりな口調で高野はそう言った。

「天田？」

ここで突然、天田の名前が出た事に神代は予想外の表情を浮かべた。

天田優一は、クラスメイトである。

物静かな印象で、誰かと喋っているのを見た覚えが少ない。

顔立ちは整っている、女子の人気は高い。

「知ってるか？ あいつ、三丁目の空き地で猫に餌やってんだ、前に注意したんだけど止めねーんだ」

それは間違いだった。

優一は餌をあげたことは無い。

きっと他の人間が餌をあげていた食べ残しでも見て、高野はそう判断したのだろう。

「しょうがねーから、威しのつもりでちょっと……な」

悪びれる様子も無く、高野は話をはぐらかそうとした。

「何をした？」

神代は高野ではなく、倉田に聞いた。

「僕にばかり聞かないでよお……」

心底困り果てたような口調で倉田は言った。

「毒を食わせたんだ」

唐突に高野はそう言った。

「何だつて？」

「この前、本を見てよ、簡単にそういうのが造れるって書いてあったから、試しに造ってみたんだ、んで倉田の家の残飯に混ぜて食わせた、そんだけ、はい終了」

そう言つて高野は両手を合わせるようにパンと叩いた。

この話はこれ以上する気は無いという意味表示だった。

「天田が近付いても、猫が逃げていくようになったら面白いだろうつて、しんちゃんが言うから……」

ぼそぼそと倉田が何か言つても高野は無視していた。

「猫はどうなった？」

神代はそう尋ねた。

だが高野はもうそつぽを向いて何も答えない。

「倉田、先生に言われたいのか？」

体つきこそ高野に遠く及ばないが、その声の迫力は高野に匹敵する物を倉田は感じていた。

「……死んだよ」

それだけぼそりと倉田は言った。

そつぽを向いていた高野が急に向き直り。

「別に俺達が悪い訳じゃないさ、口に無理やり押し込んだ訳じゃねーし、俺達が落とした物を勝手にあいつらが食ったんだ、それで死んだのはいつも餌をやっている天田のせいだって事、大体猫なんて糞を垂れ流すだけの害獣だぜ？ 駆除しちまえば良いんだ全部」

声には猫に対する憎悪に近い物を感じさせた。

神代の知る限り、高野は猫にいやな目に合わされた事は無い。

多分、高野のその意見は高野の母親の影響だろうと神代は思っていた。

神代の家は一軒家で、その庭によく猫が通り糞をして困ると、神代が高野の家に遊びに行った時、かなりヒステリックに言っていたのを覚えていた。

往々にして子供は親の影響を受けやすい。

親が嫌いだと言っていたという理由で、その親の憎悪を引き継いで嫌がらせを親子で続けるのも珍しくない話だし、それを言うならば国家間の根本にある憎悪はそういうものが関係しているはずだった。

「僕はやりたくなかったんだよ……」

倉田が必死に消え入りそうな声で弁明しているが。

「あー、もー、うっせーな、グチグチさー」

という高野の苛立ち混じりの声に萎縮したように、口を噤んだ。その時、クラスの女子が高野たちに話しかけてきた。

「何の話してんの」

「何でもねーよ」

「佐藤の話してたんじゃないの？」

その女子は、ちよつと意外そうにそう言った。

「佐藤って？ あいつどーかしたのかよ」

佐藤というのは佐藤勝利、倉田と同じく高野の子分的な存在だった。

「佐藤と同じ団地の子が言ってたんだけど、あいつ階段から転げ落ちて骨折ったんだって」

「マジかよ！」

高野の声が高くなった。

そういえば、佐藤はいつももう学校に来ている時間なのに、その姿が見えない。

高野は携帯を取り出して、すぐに佐藤の携帯に電話をかけた。

何度コールをしても繋がらない。

高野は舌打ちした。

さっきの話の信憑性が増したと思ったのだ。

その時、担任の先生が教室に入ってきた。

担任教師は、40代の落ち着きのある男性教師である、一瞬熊を思わせる体格と髭を蓄えている。

そんな大柄な先生に、高野は物怖じする事無く先生に声を掛けた。
「先生、佐藤が骨折したって本当ですか？」

一応タメ口ではないが、敬語でもない。

「ああ、良く知っているな、団地の階段で足を滑らしたらしい、骨は折ったが、命に別状は無い、ちょっと入院するかもしれないが、しばらくしたら松葉杖で登校出来るだろう、お前達も階段では気をつけるんだ、良いな？」

そこまで言うと、一旦言葉を切り。

「佐藤だけじゃない、今日は天田が……ちょっと風邪で休みだ、この季節の変わり目は風邪を引きやすい、充分に注意するように」
そう言った。

その妙に言いよんだ口調が、いつもとはつらつなその先生とは違うと、高野は子供ながらの直感で不審に感じた。

高野はまだ、自分が何に巻き込まれているのか、想像もしていなかった。

この時は、まだ。

猫の話 2

佐藤勝利は、その日の朝、気だるい体で家を出た。

昨日は良く眠れなかった。

何か悪い夢を見たような気がするが内容は覚えていない。

当たり前だ。

友達に付き合って、まさかあんな事になるなんて思ってもいなか
った。

猫を殺したのだ。

毒を使って。

親友と呼んでも良い高野真次たかのしんじに付き合って、自分はその場に居合
わせただけに近いが、気分が良いはずが無い。

それに止められなかったのだから同罪だ、と佐藤は思っていた。

その事が頭に引っ掛かっているせいで熟睡できなかったのだろう。

佐藤はいつもは、ちゃんと朝食を食べているが、その日の朝は食
欲が湧かず、母親に朝飯はいらないと告げた。

母親は息子の僅かな異変に気が付いていたが、それは深刻な物で
はないと思っていた。

だが念の為に。

「大丈夫なの？ 調子悪かったら学校休んでも良いのよ」
と言った。

仮病で休んだ事の無い佐藤を心配する口調だった。

確かに、佐藤は体が丈夫で学級閉鎖が起こるほどのインフルエン
ザが流行した時も、平気で登校していた。

そのせいで、頭が悪いから風邪を引かないんだとも言われて多少
は傷ついていた。

「大丈夫だよ、別に」

佐藤は素っ気無くそう言うと、ランドセルを背負って家を出たのだった。

まだ学校に行くには早い時間だ。

朝食を摂らずに、歯も磨いていないからその分の時間が浮いたのだ。

別に学校に早く行ってもやる事は無いが、いつも教室に早く行って誰かが来るのを楽しみにしているのも好きだ。

まるで自分の家に客が来ているような気分がするのだ。

それに友達の高野や倉田くらたも早めに来る、高野は遅い時はかなり遅刻してくる癖に、早い時は佐藤よりも早く教室にいる時もあるのだ。

佐藤の住むのは団地で、7階建ての5階に佐藤一家は住んでいた。この団地の最大の不満点は、エレベーターが無い事だった。

いつも階段を歩かされて無駄に疲れる、その理由から高野も佐藤の家に遊びに誘っても、階段が、だりいーからという理由で断る事もある。

倉田が家の外を出て周囲を見渡しても誰もいなかった。

いつもはゴミを出しに行く人の姿や、通勤前の人の姿を見るのに、やはりいつもより少し早く家をでるだけで風景が違う。

佐藤は階段に向かって歩いていくと、後方から音がした。

ナア~~~~~

それは、人の発する音じゃなかった。

佐藤は後方を振り返ったが、何も無い、誰もいない。

しかし、今の音は

猫の声？

そう聞こえた。

まさか。

ここは5階だから迷い込んでくる猫もない、それにこの団地はペットが厳禁で飼っている人はいないはずだ。

じゃあ、一体何の声なのか。

テレビか？

何処かの家のテレビが大音量で一瞬その音が響いたのだろうか？

佐藤が惑っていると、佐藤の足に何かが触れた感触がした。

それはフサフサとした、習字で使う毛筆でくすぐ擦られたような感触だった。

すぐに視線を足元に落としても、そこには何も無い、だが何かは確実に足に触れたのだ。

例えるならばそれは

猫が足に擦り寄ったような……

佐藤は恐怖に囚われた。

いつもの風景が、まるで別物に見えた、いつも吸っている空気の味すらも別物に感じた。

佐藤は汗を掻いていた。

佐藤は走った。

階段に向けて。

この場所にはもういたくない。

それを心底感じていた、一秒でも早く学校に行き、いつも強気な高野にこの話をして笑い飛ばして欲しかった。

出来れば、「嘘だと思うなら付いてきてくれ」と強気なフリをして言っ、帰り道、家の前まで高野に付いてきて欲しかった。

それほどまでに恐怖が佐藤の心を蝕んでいた。

階段に差し掛かったその時。

どん。

という衝撃を背中に確かに感じた。

それは決して強い衝撃ではなかったが、階段に差し掛かって、足元に意識を集中させていた佐藤のバランスを崩すには十分すぎるほどの衝撃だった。

「え？」

その瞬間、佐藤の足は、階段を踏み外していた。

勢いが付き過ぎて手で受身を取ろうにも完全に失敗していた。

体のあちこちをぶつけながら、階段を転げ落ち、5階と4階の階段の間にある踊り場でようやく佐藤の体は止まった。

段差にしたら20段も転がっていないが、かなり勢い良く足を滑らせて足を打ちつけ、そして頭もしたたかに打っていた。

意識が遠のく。

鼻の中に変な臭いが漂っている。

痛いというより痺れていた。

まどろむ意識の中で、佐藤の耳にもう一度猫の声のような物が届いてきた。

それが、何か激しい音がすると不審に思い様子を身に來た主婦が、階段の踊り場でピクリとも動かない佐藤を見て、上げた悲鳴の声だとは佐藤は気が付かなかった。

暗転。

・

倉田力は、家で勉強くわたりきをしていた。

腕力では、高野に遠く及ばないが、勉強ならば勝てる。

そして将来、どちらが人生の勝者となるか

それが今の密かな倉田の目標である。

親に口が酸っぱくなるほど勉強をしろといわれているが、親が言うからだけではなく、倉田の心には高野を負かしたいという強い感情が有った。

恨みではない。

見る人が見ればいじめっ子といじめられっ子の関係に見えるかもしれないが、上手く付き合っていると倉田は思っている。

高野は友達だ、乱暴な所は有るし、強引だが、そのリーダーシップは凄い。

カリスマ性もある。

口が悪いのに、何故か男子はもちろん女子からも人気がある。

運動神経抜群だし、容姿も^{ルックス}良い。

自分には無い物ばかりを高野は持っている、そう倉田は考えている。

自分が手に入れられるのは努力によるものしかない、だから倉田は高野に勝ちたいのだ。

だから、こうして勉強に勤しんでいるのだ。

それにしても、佐藤の怪我には驚いた。

頭を打っていたらしく、学校帰りに高野を含めたクラスメイトと見舞いに行ったのだが、念の為と言う事で面会は断られた。

佐藤の母親は、見舞いに駆けつけた同級生達を見て心から感謝しているようだった。

顔は、化粧も満足にしていない顔だったが、怪我をした事よりも息子の命に別状が無い事にホッとしている顔をしていた。

倉田は僅かだが羨ましいという思いを抱いていた。

自分が怪我をしたら、同じような顔をうちの親もするのだろうか
と、倉田は思っていた。

うちの母親の事だ。

自分が怪我をしたという報せを聞いても、洋服は何を着ていこうか迷うに違いないと倉田は思っている。

それほど見栄っ張りなのだ。

その時だった。

携帯電話が鳴ったのだ。

一瞬、塾の時間を報せる為にセットしていたアラームかと思ったが、音が違う。

あれは着信の音だ。

倉田は椅子から立ち上がり、携帯電話に手を伸ばした。

表示を見るが、非通知設定となっている。

誰からだろう。

こついうのには出ない方が良くと教えられた事がある。

いや、正確にいうなら、かかってきた電話に掛け直すなど注意されたのだ。

そついうのはワンコールで切って、掛け直してきた相手から金を請求する悪徳の何たらだとか、倉田は親から教えられていた。

だが、全然鳴り止まないこれにはどう対処すれば良いのだろう。

倉田は、迷いながらも通話ボタンを押した。

「……もしもし？」

名前を名乗らずにそう言った。

倉田の知り合いならば、それで名乗ってくれるだろうと思った。だが、そこから聞こえた音は、人の声ではなかった。

ナア~~~~~

甲高い音が耳に飛び込んできた。

倉田は思わず携帯を耳から離れたが、今の音はまるで……

猫の鳴き声？

電話は既に切れていた。

非通知設定なので掛け直すことは出来ない。

一匹の蛇が背骨に纏わり付くような寒気を倉田は感じていた。

学校で神代^{かみしろ}に猫を殺した事について説教されて罪の意識は深くなっているし、高野は高野で怯えた倉田を面白がって、猫にまつわる怖い話を倉田に散々聞かせたのだった、それで倉田は自分が猫に復讐されるのではないかと、非科学的だと自分で自分を諭しながらも、形容不明の恐怖を覚えていた。

今日はもう、家で勉強をするのは切り上げて、塾に行こう。

倉田はそう思った。

きつと今の電話は間違い電話か何かだろう。

塾に持っていくのは、リュックサックだ、その中に教科書とノート、筆記用具を入れている。

塾の場所は有名な塾にわざわざ通っているので、バスで30分かかる。

倉田はバスに揺られていた。

いつもこの時間のバスは空いていて、楽に席に座れる。

今の時間は18時である。

塾が始まるのは19時からで、終わるのは21時30分だ、さすがにその時間に終わるので親が車で迎えに来る。

少し早めに着くが問題ない、かなり早めに着いて自習をしている生徒の方が多い、そういう塾なのだ。

そういえば

昨日出された宿題は、ちゃんとリュックに詰めたか、倉田は心配になった。

宿題は終わっているのに、忘れて。塾の講師に、「家に忘れました」なんて、宿題をやり損ねた奴の常套句のような言い訳をしなくなかった。

背負っているリュックを膝の上に載せて、手を突っ込んでそれを探した。

リュックの中からそれを指先の感触だけで探るのは別段難しい事

ではない。

かり。

「痛^{いた}つ！」

一瞬針で刺したような痛みが指先に走った。

筆記用具を入れていたケースからシャーペンでも飛び出して、それが刺さったような痛みだった。

指先を見ると血が滲^{にじ}んでいた。

（ついてないなあ……）

その血を舐めとると、倉田はもう一度リュックに手を突っ込んだのだった。

その時、異常な感触が倉田の指に触れた。

生温かい物。

ざらざらした感触。

べっとりとした手触り。

悪寒が走る感触だった。

昔、リュックの中に飴を入れっぱなしで、その存在を忘れてべとべとに溶け出した飴に触ったことがある、感触自体はそれに似た物があるが、だがその飴は生温かさを感じたりはしなかった。

倉田は思わずリュックを覗き込んでいた。
驚愕した。

リュックの中のモノと眼が合った。

倉田は、悲鳴を上げながら停車ボタンを押した、既に他の人がそのボタンを押していたのだがそれにもまるで気が付かなかった、一刻も早くバスを降りたかった、タイミング良くバスは停留所に止まっていた。

倉田はリュックをそこに置いたまま駆け出していた。

バスの中の乗客が、「忘れ物！」と言っている言葉を無視して走った。

そこは全然、降りた事のない場所だったがそんな事はどうでも良かった。

あの恐怖から逃げられるのであれば、停留所がどこでも構わないリュックもあの中に入っている勉強道具一切もまるで惜しくなかった、名前の書いている品が入っているから、多分戻ってくるのだろが、あのまま捨ててしまっても一向に構わなかった。

あの中には、猫がいた。

正確に言うとリュックの中には、猫の生首が転がっていた。

しかもそれは首だけなのに、眼を見開いてこつちを見たのだ。

その紅い舌がちろちろと動くのまで見た。

自分の指先を傷つけた物と、舐めた物の正体に気が付いた時は心底震えた。

もうその場から逃げる事しか頭に浮かばなかった。

哀れなほどの声をあげながら、倉田は走っていた。

土地勘など無い、見覚えの無い道をただひたすら恐怖に突き動かされて走った。

息が完全に上がっていた。

動悸が治まらない。

緊張により喉が渴いていた。

本当ならば人の多い繁華街に向かいたかったが、いつの間にか辺りは人氣が無い場所だった。

とりあえず、喉の渴きを癒したい欲望にかられた。

ジュースの自動販売機が倉田の眼に止まった。

ポケットから小銭を取り出して入れると、スポーツドリンクのボタンを押した。

冷たくて、心が落ち着く飲み物ならば何でも良かった。

ボトル缶のジュースの蓋を捻^{フタ}ひねって、中の飲み物を一気に喉に押し

込んだ。

むせた。

「ごっ、がはっ！」

倉田は口に含んだ液体のほとんどを吐き出していた。

むせたのは、慌てて飲み物を口に含んだからではない、それもあるが、一番の理由は口の中に異物感を感じたからだ。

吐き出して、まだ口の中に残るその異物を手で取り出した。

そのボトルのどこに、これほど入っていたのかと思えるほどの量が口の中に溢れていた。

それを見た時、倉田は強烈な吐き気を覚えた。

それは、動物の毛に見えた。

まるで長毛の猫の体毛に。

その時、倉田は横に気配を感じていた。

人の気配ではない。

では何の気配か。

その正体に気が付いた時、倉田の手からボトル缶が落ち、中身の液体がアスファルトの地面に広がっていた。

悲鳴が響いた。

猫の話 3

学校に來た倉田力の様子は明らかにおかしかった。

いつも、それほどハキハキしている性格ではないが、今日は特に酷い。

元々色白の顔が、病人の顔色のように青白く見えた。

高野真次も、倉田の異変に気付き、さすがに心配そうな声を掛けた。

「おい、リキ。どうしたんだよ、お前……」

その言葉に、倉田は顔だけ高野に向けて、愛想笑いのような物を浮かべた。

いつも浮かべる笑みとは異質の笑み。

魂がどこかにストンと抜け落ちたような笑みだった。

「おい……」

高野の声が珍しく尻すぼみになっていた。

何か、高野ですらたじろかせる、奇妙な物を倉田は身に纏っているのだ。

「僕の、どこか、変かな」

言葉を千切って捨てるような口調で、倉田はそう言った。

まるで英語に不慣れな日本人が話す英語のように、言葉と言葉が繋がっていない。

それに口調もいつもと違う。

でも、異常というほどではない気がする。

その時、神代仁かみしろひとしがやってきた。

「どうしたんだ？ 一体」

「いや、俺も分かんねえんだけど、何かおかしいよなりキの奴」

高野は困惑した表情で神代に答えた。

「ああ、おい、倉田。体の具合でも悪いのか？」

気遣う声を掛けたのだが、倉田はまるで気にも留めずに自分の席に着いていた。

更に声を掛けようとしたのだが、その時先生が教室に入ってきた。どことなく、体全体に何か見えない重しを乗せられているような苦痛を堪えているような表情に見えた。

高野はおかしいと思っていた。

何かがおかしい。

昨日の勝利かつしの怪我も、今日の力りきの様子も。

何かが妙だ。

もしかしたら

あまだゆづいち
天田優一。

あいつが何か関係しているのかもしれない、高野はそう思った。

昨日からあいつは学校を休んでいる、今日もまだ学校に来ていない。

俺達が毒を猫に喰わせた事を、あいつが知ったら……

復讐ふしゅうをするかもしれない。

昨日、階段から転げ落ちた勝利かつしも、実は学校を休んで天田があいつの家の付近に隠れて、隙を突いてその背中を押したんじゃないか？
そう思った。

力りきの様子がおかしいのは、学校から帰ってから天田が何か脅すような事を言つて来たんじゃないか、学校の成績やら評判を気にする力りきは、猫を殺した事を先生に密告ちくされると、困る事になるはずだ。

あいつ
天田優一が全ての元凶なのか？

考えがちよつと飛躍しすぎかもしれない、そもそも気弱な印象を受けるあいつに人を階段から突き落とすなんて出来るわけ無い。だが、昨日の先生の態度も妙だった、何か腑に落ちない物を感じる。
後で力りきを問い詰めるか、今日こそ勝利かつしの入院先に行ってあいつから直接話を聞か、もしくは 天田の家に押しかけるつもりだった。

だが。

その時、先生から予想外の言葉が発せられた。

「皆さんに残念なお知らせがあります」

重く妙に丁寧な口調だった。

そのクラスの全員が、その先生のそんな声を聞くのは初めてだった。

一瞬クラスがざわついた。

そのいつもだったら大声で怒鳴ったりする事もあるのに、先生はざわつきを抑えようとせずに、自然と静かになるのを待っているようだった。

クラスが、まるで水を打ったような静けさになると、先生は口を開いた。

「先生は嘘をついた。昨日休んだ天田なんだが……、実は風邪で休んでいたわけじゃないんだ」

またクラスがざわつく。

高野は、先生が何を言うのか、その言葉をただ静かに待った。

神代も、倉田も、他のざわつく生徒とは違って、静かに言葉を待っていた。

そして先ほどと同じようにクラスが静まると。

「君達は5年生だ、高学年になる。これから先生が言う事も受け入れられる年齢だと私は思う、だから包み隠さずに言うが、天田は

……天田優一は、本日死去した」

クラスが尋常ではない騒ぎになった。

あまりにも予想外のことに、高野も面食らっていた。

他のクラスにも響き渡りそうなほどの騒ぎになりかけたので、さすがに先生は。

「静かに！」

と、威厳のある声を発していた。

それで、クラスは仮初めかりその静寂を取り戻していた。

「これから校長先生の全校集会が開かれる、その前にはつきりさせておきたいんだが、少なくとも私はこのクラスにはイジメが無かったと思っている、皆はどう思う？」

クラスの誰もが口を開かない。

質問の意味が掴めていないせいでもある。

いじめ？

天田の死は、もしかして事故とかじゃなくて……

「自殺ですか先生！」

高野が、立ち上がってそう言った。

その言葉に、先生は一瞬顔を曇らせた。

どうやら凶星のようだ。

「ああ……、遺書が見つかったな、首を吊っていたようだ、すぐに見つかって病院に搬送された、昨日はそのまま意識不明で、そして今日息を引き取ったんだ……」

高野の考えは間違っていたという事になる。

いや、それ以前に自殺の理由は

もしかしたら、猫の死による物なのか？

馬鹿な。

高野はそう思った。

たかが猫が死んだくらいで、自殺していたらキリが無い。

それが高野の常識だった。

その後も重苦しい空気と話しは続いたが、天田がいじめられていたという話は出なかった。

確かに人付き合いの良い方ではないが、嫌われるような奴ではなかったからだ。

遺書の内容までは先生は言わなかった、もしかしたら先生も知らなかったのかもしれない。

それから校長が全校集会で命の尊さについての長い話をして。
クラスは、授業どころではなかったが、それでも普通の授業を続けていた。

休み時間の話題はその話で持ちきりだった。

高野はぶすつとして、無言で席に座っている。

倉田は珍しく机に腕を枕にするようにして眠っていた。

毒を食わせて猫を殺した事が、天田の死の原因かもしれないと思
い、落ち込んでいるのかもしれない。

クラスの中に妙な異臭が漂ってきたのは、2時間目が終わった辺
りからだった。

生臭い匂いがするのだ。

異様な匂いだった。

街中で嗅げば近くにある鮮魚の店の匂いか、と納得も出来るのだ
が、それが学校の中だとかかなりの異臭である。

どこからその匂いがするのか、高野は気になった。

匂いの元を辿ると、そこは 倉田の席だった。

意外だった。

あいつは親の躰しっけが厳しくて、不潔な物を一切持ち歩かない、それ
に小学生なのに香水までつけて匂いに人一倍気を使っているはずだ
った、本人がそれに対して何もしていないのがおかしかった。

相変わらず、机に突っ伏して眠っている、授業も今日は先生が天
田の自殺で不安定なクラスを纏める事に精一杯で、普段は優等生の
倉田にはあまり触れなかったのだ。

高野は思い切って声を掛けた。

「おい……リキ、お前、何か匂わないか？」

いつもなら、「何かクセーぞ！」とか声を掛けるはずの高野が、
どこか慎重に声を掛けていた。

倉田は反応しない。

高野はさすがに苛立ち、その肩に手を乗せて、揺すった。

「おい！」

かなりの力を込めて揺すった、倉田の体が動いて机に当たった。その時だった。

ぼと。

そういう音がして、倉田の机の中から何かが落ちた。

教科書ではない、そういう形ではない。

何だ？

そう思い、高野はそれに視線を落としてそのままの姿勢で固まっていた。

高野はそれを見て絶句していたのだ。

それは魚だった。

それも生魚である。

高野は魚に詳しくないが、それでも知っている魚 アジ 鰯であつた。

大きさは20cmくらいのそれが、丸々一匹足元に落ちた。

普通、食べ物が机の中に詰められていても、それはパンとかだ、パンにしたって倉田はそういう物を詰めるタイプの人間じゃない、ましてや生魚を机に入れるなんてどうかしている。

他のクラスメイトはそれに気付いていない。

高野だけがその異常に気が付いている。

倉田は、ぴくりと体を震わすと、凄まじく俊敏な動きをした、これほど俊敏な動きをする倉田を見るのは高野は初めてだった。

そして足元の鰯 アジ を、素早く指先に引っ掛けるようにして引っ繰ると、それをそのまま口に放り込んだ、そしてそれを噛みながら、また先ほどと同じように机に突っ伏して眠ってしまった。

それは、人の動きとは思えないほど素早かった。

まるで、魚屋から魚を掻 か 攪 さ う猫のような動きに見えた。

落ちてゐる物を食べる。

それも一体いつから置いて有るのか分からない生魚を。
そんな事は倉田だろうが、誰だろうがやる奴はいない。

高野は啞然とした。

声も出なかった。

ただ、倉田が鰯^{アジ}を骨ごと噛み砕く音だけが、高野の耳に届いてい
た。

それ以上は、いくら高野だろうと追求できそうになかった。
一体何が起きているのか。

その日は、クラスの生徒の動揺を考えて、午前授業のみとなった。
高野は倉田をずっと観察している。

倉田はその視線を気付いているのかいないのか、ごく普通の行動
をしているように見える。

一見すると、だ。

いつも遊んでいる高野にはその行動の節々に違和感を感じる事が
多々ある。

何気ない動作なのに、それがいつもと違うのだ。

それ以前に、先ほどのあの魚を喰った異常な行動は、どう前向き
に考えても高野の常識の範疇^{はんちゆう}を超えている。

病院に連れて行ったほうが良いかもしれない……高野は真剣にそ
う考えていた。

今日の授業が終わり、教室から出た倉田を高野は追った。

下駄箱で靴を履き替えた後、勇気を振り絞って高野は倉田に声を
掛けた。

「おい！ 待てよ！」

その声に、倉田はびくんと体を竦^{すく}ませたかと思うと急に走り出し
た。

二足歩行ではない、何と倉田は四つん這いの姿勢になり、両手
足で地面を駆け出したのだ、そうまるで

猫のように

高野は走って追いかけた。

しかし、早い。

いつもは普通に走って絶対に負けることなど無いのに、今は変則的な走り方で、普通の人間ならばまともな速度が出ない走りに違いないはずなのに、まるで追いつけない、何とか走って引き離されない程度の距離を保っていた。

いったいどこへ向かっているのか。

これが後、1〜2kmも続くと、もう体力が続かないと思っていたが、しばらく追いかけると倉田がどこに向かっているのか、その見当がついた。

あの空き地か。

猫を殺した空き地に向かっているのか、これは。

因縁めいた物を高野は感じていた。

本当に追いかけて行って良いのだろうかという思いも湧いた、だがここで追いかけないでモヤモヤした気持ちのまま家に帰る訳には行かない。

空き地に着いた。

そこに猫はいない。

倉田は、そこで止まり一瞬高野を振り返った。

ぞっとした。

それは人の眼ではなかった。

人の持つ、知性とかそういう物の色がそこには感じられなかった。思わず高野は身構えていた。

その時だった。

倉田は駆け出した。

またしても四足歩行の動物のような格好で。

高野に向かってではない、空き地の端にある、民家の塀を目指し

ていた。

そこにあるのは

「おい待て！」

高野は叫んでいた。

逃げられる、と思ったからではない。

倉田の身を案じての叫びであった。

倉田の目指した場所。

そこには、民家が不審者が入らないように柵にいくつもの刺のついた鉄線の鉄条網が張り巡らされていた。

それに気付かないように、倉田はそこに突っ込んでいくのだ。

高野は止めたが、間に合わなかった。

顔面から突っ込んだ。

身を裂くような悲鳴が響き渡っていた。

倉田の悲鳴である。

高野は近付き、その顔を見た。

酷い有様ありさまだった。

手はもちろん、顔もどうやったらこれほどまでの傷が付くのかと思えるほどの痛々しい傷跡であった。

その傷は、まるで何か動物が顔面を引っ掻いたような傷跡に見えた。
た。

そう、まるで巨大な猫か何かが引っ掻いたような。

猫の話 4

高野真次は、すぐに救急車を呼び、意識を失っている倉田力^{くらたつき}はすぐに病院に運ばれそのまま入院した。

未だに倉田は気を失ったまま、意識は戻っていない。

倉田の傷は、手の傷こそ軽傷だが、顔面は酷く傷つけられていた、その傷は瞼^{まぶた}の肉を抉り、眼球にも傷が至っていた、たぶんどのような処置をしても今後傷跡は残るだろうと言われた、もしかしたら視力も戻らないかもしれない、と。

肉体的な傷もそうだが、高野には精神的な問題の方が重大に思えた、まだ意識が戻っていないから何ともいえないが、地面に落ちた生魚を頭から喰うような状況が続いているのならば、精神^{そうち}の方が重傷だろう。

状況から言うと、高野に疑いの眼が向けられた、誰も口に出してこそ言わないが、「自分で突っ込んで行った」という高野の証言に、疑問を感じているのだ。

何しろ、走っている（四つん這いという奇妙な格好だが）倉田を、高野は追いかけている光景を目撃している生徒が何人かいた。

何らかの理由で高野から逃げたかった倉田が、空き地に追い詰められて、どうにかして逃げようと鉄条網に飛びついたのではない、そういう視線を高野は向けられていた。

何しろ天田の死の直後である、周りの大人の過敏な反応をする、それが高野には煩わしかった。

それどころではないのだ。

倉田の怪我は心配だし、自分が疑われているというのは気に障る、天田の死の責任すらも（多少あるかもしれないが）押し付けられているような状況は望む所ではない。

だが、そんな問題ではないのだ。

次は自分だ。

その事が高野を支配していた。

まず間違いない。

佐藤、倉田と不審な怪我を負って、最後に残ったのは自分、この状況はどう考えたって不安を感じる。

高野は怯えていた。

体格こそ小学生の規格を超えているとは言っても、中身は小学生だ、怖い物は怖い。

相手が分かれば、それに対して何らかの対応は取れるが、相手の得手すらも知れない。

まるで先の見えない洞窟に迷い込んだようだった、そしてその洞窟には自分を付け狙うモノが、闇に潜んでいるのだ。

高野が頼ったのは神代かみしろひとし仁だった。

同学年で、唯一自分に物怖じしないで話しかけてくる、そして頭も良い、勉強だけでなく会話をしていてもそう思う、それほどの知性を感じさせるのだ、同学年だからとか以前に、高野が知っている人間の中で一番頭が良くて頼れるのはこいつだと思っていた。

あいつなら、この自分が置かれた状況を理解して、そして何らかのアドバイスをしてくれるかもしれない。

そう高野は思ったのだ。

神代が高野の家に訪れたのは、夕方過ぎだった。

本来ならば、病院で倉田に付き添っていたかったのだが、倉田の母親に「今日はもう帰りなさい」と言われたので、高野は仕方なく家に帰っていたのだ。

高野の家には高野と神代以外は、誰もいなかった。

高野の母親は、今、倉田の病院に言っているところだ、倉田の母

親に謝っているのかもしれない。

過保護気味の高野の母親だが、

本当は謝る筋合いではない、倉田は自分で突っ込んで行ったのだ、高野は必死でそれを止めようとしたし、その後は救急車も呼んだ。

感謝されても謝罪する立場ではない、だが高野は大人達がそれを理解してくれないと知っている、だから何も言わないのだ。

「何だか妙な事が続いているな」

神代は、大人びた口調でそう言った。

今はその落ち着きが高野にとっての救いだった。

「あ、ああ……、どうすりゃ良いのかな、俺は」

「とりあえず事情を聞こうか、まずは倉田だよ、何もしてないんだろ？」

「当たり前だ！ あいつ、自分で突っ込んだんだ、教室にいる時から変だったしよ！」

「まあ、落ち着けよ」

神代は高野を諭すように言った。

「とりあえず目撃者がいないから、お前が何かしたって証拠はどこにも無い、逆に何にもしていないとも証明できない、とりあえず倉田の意識の回復を待つってところだろうな」

まるで師匠が弟子の過ちについて、激昂はせずに淡々とその事について語っているような口調だった。

「そっちは良い、後でどうとでもなるだろうし、問題は」

高野は焦って言葉を繋ごうとしたが、神代が

「まあまあ、落ち着けよ。気を休ませるんだ」

そう言った。

まるで澄んだ水のような目で神代は高野を見ていた。

その眼を見ていると、心の中の焦りが徐々に穏やかになっていくような気がしていた。

その夜。

布団の中で、高野は状況を冷静に考えていた。

神代は、高野の状況を、混乱パニックによるなんらかの軽い精神的な異常だと判断したようだった。

神代の言う通りに気を休めると、自分でも信じられないくらいに落ち着きを取り戻していた。

そうなってみると、これまでの事件がまるで全部自分に覆い被さって来るような恐怖が、大分薄れていた。

たまたまかもしれない。

そついう発想が浮かぶほどになった。

過剰に反応するほどじゃない。

佐藤にしたつて、階段からたまたま転げ落ちただけだ、その前日に猫を殺していなけりゃ、心配もするし、運が悪いとは思っても、他にはどういふ不吉さも感じなかったはずだ。

多分、倉田は佐藤の怪我を猫の事と結び付けすぎたんだろう、だから精神的に参ったんだ、そうに違いない。

それだけではなく、天田の死という普段滅多に遭遇しない知り合いの死という状況が倉田に追い討ちをかけたんだ。

得体の知れない物を意識しすぎて、自分自身を見失ってしまったんだろう。

幽霊の正体見たり枯れ尾花という言葉を神代から教えてもらったが、なるほど確かにそうなのかもしれない。

自分では、猫を殺すことくらい何とも思っていなかったが、さすがに同級生の死というのは、動揺するに値する出来事だった。

だが、落ち着いて見ると、どういふことはない、たまたま色々な事が重なっただけなのだから。

そつ考えながら、高野は眠りに落ちようとしていた。

高野はその時感じていた。

何かの気配を。

兄弟はいない、そして高野は自分の部屋で一人でベッドで寝ている。

誰かが入る事などありえない、あつたとしてもドアか窓が開かない限りはないはずだ、そういう気配は無い。

嫌な汗が高野の首筋に浮かんだ。

それを拭おうと、右手を動かそうとしたが、その時驚愕した。動かない。

これが金縛りという奴なのだろうか。

体がまるでピクリとも動かないのだ、脳の指令が体の末端に行く途中に遮られているような気分だった。

自分の体ではなく、何かの入れ物に押し込められているようなそんな感触を高野は味わっていた。

気配は闇の中に潜み、高野をジッと見詰めているように感じる。

何だ？

何がいるんだ。

その時だった。

唐突に声が聞こえたのだ。

それも意外なほど近く、まるで耳元で囁くような声だった。

「不味かつたな……」

何かの気配はいつの間にか高野の枕元に感じていた。

高野は身動きできないが、その体が冷たいものを感じていた。

その声は、小さいがはっきりとした口調で言っていた、高野が聞いた事が無い声だった。

「あれは不味かつた……」

最初の声とは違う声が聞こえた。

その声の主も高野の枕元にいるようだ。

「お前のくれた食べ物、不味かつたぞ」

また違う声が高野の耳に届いた。

どうやら3人が動けない高野の枕元にいるのだ。

3!?

高野は自分が殺した猫の数を思い出していた。
あれも、確かに3匹だった。

戦慄に似た物が高野を貫いていた。

声はまだ続く。

「喉が焼けたな」

「焼けた」

「全部吐いたな」

「吐いたよ」

「苦しかったな」

「哀しかったな」

「痛かったな」

「どうしてくれような」

「同じ眼にあわせようか」

「毒を食わせてやろうか」

「待て、同じじゃつまらん」

「それもそうだ」

「そうだ、そうだ」

「持って行くか」

「持って行くか」

「どこを持っていく」

「眼はどうだ」

「眼は前の奴から貰ったな」

「そうか」

「足はどうだ」

「それは前の奴から貰ったわ」

「ならば舌はどうだ」

「人の舌などいらねえね」

「それもそうだ」

「ではどうする」

「どうする」

「どうする」

「どうする」

高野の耳元で囁かれている会話の内容は、高野の心臓を鷲掴みにするほど恐ろしかった。

まるで断頭台キロチンに首を置かされて、いつ刃を落とすのかを話し合っている会話が聞こえてくるように怖い。

まるで高野は雨の冷たさに震える子猫のようだった。

これまでの人生で感じた事の無い恐怖に、頭から喰い付かれていた。

その時だった。

何かが高野の首に巻きついてくるのだ。

生温かく長い物。

一瞬蛇を連想させたが、蛇はひんやりとしているはずだ、それは血の通った温かさを感じさせる。

尻尾！？

今、高野の首に巻きついてるのは猫の尻尾なのか。

そろり、そろりと、それは高野の首に巻きついていく。

ぞくぞくするような恐怖、真綿で絞められるとはまさにこの事のような恐怖を高野は味わっている。

まだ苦しみはまるで無い。

だが恐怖だけはある。

失禁してしまいそうなほど怖い。

怖い、怖くて堪らない。

だがそれが言葉にする事すらも出来ない。

助けてくれ！

強く、そう念じるが誰も助けに来てくれない。

隣の部屋に寝ているはずの両親にも、その心の声は届かなかった。

「貰うか」

「どこを貰う」

「何を貰う」

「決まった」

「決めたか」

「そうか」

「命」

「それしかない」

「そうだな」

「うん」

「うん」

「うん」

その声が高野の耳に届くと同時に、一気に高野の首は絞められていた。

喉が潰されて、呼吸が出来ない。

高野はそのまま意識を失っていた。

意識を失っても、その力は決して消えず、強烈な力で高野の首を絞め続けていた。

・

翌日。

高野は自室で、首を吊って発見された。
もちろん、完全に絶命した状態で。
遺書は見当たらない。

前日の事件を含めて考えられて、罪の意識で とうとう何とも腑^ふ
に落ちない結末でこの件は片付けられた。

神代仁は、一人で猫達が殺された空き地に来ていた。
その顔に浮かんでいるのは悲しみではなかった。

「……思った通りになつたな」

神代はそう呟いていた。

猫の話 5

3匹の猫達が殺され、それを見た天田優一あまだゆういちは首を吊り、猫を殺した3人組はそれぞれが悲惨な目に合った。

全ての発端であるその空き地で、神代仁かみしろひとしは震えていた。震えている理由は寒いからでも、怖いからでもない。

喜んでいるのだ。

身の内から溢れんばかりの喜びが体を震わしているのだ。

神代の顔に浮かんでいるのは歪んだ笑顔だった。

とても小学校5年生には見えない。

大人びた、というよりも何か異質なものを感じさせる笑みだった。

神代仁は、以前から興味があった。

それは人の精神こころについてだ。

医者である両親に教えられ、また自分でも医学書などを読み、人の肉体についてはかなり詳しく分かったが、それ以外の人の心理と言う物に激しい興味を抱いていた。

そしてこれまで何度か実験をした。

今回の実験は今までで一番の劇的な結果となった。

まずは、猫だ。

高野が猫に嫌悪感を抱いているのも前から知っていたし、天田が猫をこの空き地で可愛がっているのを何度か見た事があった。

これを結びつけて何か出来そうな予感を神代は感じていたのだ。

まずは、高野をそれとなくこの空き地に、それも天田が猫と遊んでいる時に誘って前を通りかかったのだ。

そして、高野が

「天田の奴、猫に餌やってんじゃねえのか？」

と、悪感情を抱くのを確認したら、さりげなく

「ああ、そうだな。ああいうのは近所の迷惑になるしな」

と、それを助長させるような事を言つてやったのだ。

それから事有ることに、高野が天田に対して怒りを持つような細工を続けた。

それに、毒の造り方だつて、あいつは神代家うぢに置いてある本を見て知つたんだ、本人にはそれを忘れさせていたが。

いつになれば、その時が来るだろうと、神代はずっと待つていた、この観察者は絶対に焦らず、冷静に、そして根気良く待ち続けた。まるで野生動物のカメラマンが、目的の写真を撮る為に何日もかけて辛抱強く待つような姿勢に似ていた。

そしてその時が来たのだ。

高野は猫に毒を盛った。

本来ならば、そんな事をしたりするには抵抗を感じるのだが、その感情も人間が持つ怒りにかかれれば何のブレーキの役割も果たさない。

他の腰巾着こしぎんちゃくの二人は問題ない、高野がやると言つたらそれを拒否したりは出来ない意志薄弱な連中だと神代は見下しきつていた。

猫の死体を前に、呆然とする天田に近寄り、心配するような口調で、誰がやったのかを神代は推測として伝えた。

これで、天田が何らかの報復をするだろう、そう思った。

それと同時に、毒を盛った高野以外の二人には、精神的な重圧プレッシャーをかけて、人がそういう物に対してどういう反応を示すのかを観察したかった。

だから、わざわざ朝早くに佐藤の団地に行き、隠れて猫の声を録音した音を響かせたのだ。

その反応を見て、楽しもうと思ったただけなのだが、予想外にも佐藤はみつともないほどに慌てて、階段から転げ落ちてしまった、だが別に神代は助けを呼んだりはいしない、そもそもその団地に住んでいない神代の姿を誰かに見られるのは不都合だった。

その後、神代は普通に登校した。

天田は学校を休んだ、精神的に貧弱な奴だと、神代は天田を内心、馬鹿にしていた。

これでは報復どころではないだろう、仕方ないから残る倉田に猫を殺した罪の意識でどういう変化が訪れるかを観察するしかない、神代はそう思った。

高野は、猫を殺した事に関して、罪の意識を僅かには感じていたかもしれないが、倉田ほどではない、中々強引な手を使わないといけなくなりそうなので、高野は後回しにした。

倉田に関しては、非通知で電話をかけて、猫の声を聞かせた。

まだ序の口だ、それからどうしようか翌日の反応を見て考えるつもりだったのだが、翌日の倉田は明らかにどこかおかしかった、たかが猫の声を電話で聞いただけであれほど劇的な変化が現れるものだろうか、神代は思ったがあえて声も掛けずに、そのまま観察を続けた。

するとその日は思いがけない収穫が有った。

天田の死だ。

たかが猫を殺した程度で、自らの命を絶つとは予想外だった。

だが、その予想外を利用してやろうと神代は思った、猫の死ならばともかく、人の死ならば高野にもその罪の意識は芽生える、そうなればどう混乱してどう変化するのかを観察できる、神代はそう考えた。

その後、倉田の暴走までは想像できなかったが、その後の高野は自分で対処できなくなり神代を頼った。

これも予想通りだった。

つまるところ、神代が知リたかったのは、人が暗示によって精神異常をきたすか、あるいは死に至るかどうかである。

これまで、何度か高野に暗示をかけていた。

困った時に自分を頼るように暗示を事前にかけてたり、都合の悪い事は記憶しないように暗示をかけていた。

人がどれほど狂いやすいか、それは様々な文献で学習していたが、暗示により人が自らの命を絶つのはかなり難しい事だと知っている。だからこそ挑戦したかったのだ。

だから倉田には恐怖を与えるつもりだった（予想以上に脆くてほとんど参考にならなかったが）。

そして高野にはその暗示により、罪の意識と他にも様々な要因をぶつけて、どう反応するかを観察したかった、あわよくば自殺に至ってくれば成功だ、そう考えたのだ。

そして、ついに高野は自分の命を絶った。

それが神代には嬉しくて堪らないらしい。

だが。

それだけでは色々と説明が付かない。

佐藤は、背を押された感触を味わって、そのせいでバランスを崩し階段から転げ落ちた。

倉田は、電話だけではなく、その後リュックの中の猫の生首、そして自動販売機で買ったジュースの中に入っていた猫の毛、その後の異常行動。

高野は、夜、枕元で話し声を聞き、何かに首を絞められた。

それら全てが、暗示と恐怖による幻覚によるものだと言明が付くのだろうか。

神代の視線の先にはいつの間にか、一人の少年が立っていた。

足元には猫が3匹寄り添うようにしている。

その少年は顔を俯きにして、表情は窺えない。

その周囲に纏っている物は生者の持つものとは別の何かであった。

「ああ、君達か」

神代は、それを見てもまるで平然としていた。

「天田、君が死ぬとは予想外だったよ、でもお陰で色々と実験が出来た、礼を言うよ」

神代は彼らが死者であると理解していながら、まるで怯えていない。

幽霊だとか、そういう非科学的な存在の彼らを、『理解』しているようだった。

少年　天田が、顔を地面に向けたまま猫と共に、ゆっくり神代に近寄ろうとしたが、その時神代は声を発した。

「無駄だよ、僕も連れて行こうとしてもね、確かに君達に毒を盛った高野は、僕に操られていたようなものだが、それをやったのはあくまで高野の意思だし、僕はまったく関与していない、高野は自分の馬鹿さ加減で死んだようなもんだ。だから君達の牙は僕には届かない、届く為の罪悪感には僕には無いし、因果も無いからねそれは無理だ」

まるで神代本人以外には理解できない事を言った。

だが、その通りのように天田と猫達は神代には近寄れないでいた。

「それに、もう力なんてほとんど残っていないんだろう？ さっ

さとあの世に行けば良いのに」

嘲笑うかのように神代はそう言った。

その時。

神代の首を何かが掴んだ。

人の手だった。

「……高野か」

神代の声はまったく変化していない。

確かに神代の首を掴んでいるのは、昨日死んだはずの高野の手であつた。

死んだはずの、高野の手がその冷たさを伝えているのに、それに対してもほとんど無感動なほど落ち着いていた。

「高野、君に僕を呪うだけの動機が有るのか？　自分自身の罪の

意識で命を絶ったような物なのに？ 自分が何に巻き込まれて死んだのかすらも分からない君は、^{そそのか}唆されてここに舞い戻っただけだ、何も出来やしない」

いつもと同じように諭すように、神代は言った。

確かに高野のその手は、冷たいがまるで力が込められていない。

その手を振り解くと、神代は勝ち誇ったように笑った。

「お前らは、自分が何に操られて生きているか、それすらも知らない！ 勝手に殺して恨んで殺されて、はは！ 最高の劇^{ショー}だったよ、高野、お前はいつも自信に満ち溢れていたが、その自信すらも僕が植えてやったつてのも知らないんだろ？」

高野がガキ大將的な存在として生活していたのは、神代が行った精神操作の一環であるとそう告げていた。

天田と同じように顔を俯き加減で表情を見せないが、高野は恨めしそうな気配を漂わせていた。

それは天田も、そして猫達にしても同じだった。

「どうした！？ 天田！ 高野！ あるいは猫達だって良い、お前ら、僕に恨みを持っているんだったら、どうにかしてみろよ！ どうにも出来ない！ 死者だってルールがある、そのルールに雁字^{がんじ}搦^{がら}めのお前達なんてまるで怖くないね！」

神代は狂ったように笑っていた。

それは絶対者の笑み。

全てを見下ろして、そしてそれら全てを無価値と断ずる存在の笑みだった。

その時だった。

天田と高野の指が何かを示すように、同じ方向を指していた。

神代は、笑いを止めて、その視線の先を目で追った。

その時、神代の顔が引き攣った。

そこに立っていたのは、神代が見覚えのある顔だった。

天田や高野のような死者ではない。

生きている人間である。

一体いつからそこに立っていたのか。

立っていたとしたら、今までの神代の言葉を全て聞いていたという事になる。

普通ならば、ただの戯言として聞き流す、あるいは神代のことを頭がおかしい子供だと割り切るだろう、だがそこに立っていたのが事件の関係者だったとしたら？

「たつ、高野の……」

それは高野の母親だった。

何度か神代は会った事があるので間違い無い。

その手に握られているのは、包丁である。

それが何を意味するのか。

可愛がっていた猫を殺された者が自殺する可能性よりも、実の息子を死に追いやった者に復讐をする可能性の方が動機としては充分すぎる。

それは神代のように頭が良い人間でなくとも分かる。

考えるまでも無かった。

神代は悲鳴を上げていた。

完。

猫の話 5（後書き）

オチとしては成立しているような……、していないような……、表
現力不足です、それと途中の説明が足りないかもしれません。
ご意見ご感想をお願いします。

映画館の話

僕は映画は好きだが、映画館で観るのは嫌いだった。

何しろ、他人が傍に居るのが嫌だったし、トイレに行きたくなったら映画どころではない。

それにマナーの悪い客もいる。

携帯が鳴ったら許せないし、何かを食べる音も気になる（僕自身ポップコーンを食べるのは好きなのだ）。

マナーとは違うが、笑い所ではないのに笑う客、驚きの声が大きい客も気に障る。

だから映画は一人でレンタルして家で観るに限る。

間違っても男二人で観に行く物ではないし。

それが、特に興味を惹かれていない映画ならばなおさらだ。

それでも人付き合いは重要だし、その映画を観た事を話し合うのも嫌いじゃない。

だからこうやって電車に揺られて映画館のある街に向かっているのだ。

前に立っている奴は中学の同級生で、高校に入ってからもちよくちよく会っている、お互いの学校の文化祭に行ったりもしている。

中学の時から映画の話でよく盛り上がって、映画のタイトルでの尻取り、あるいは映画俳優での尻取りで一日中熱い戦いを繰り広げた事もある。

それを思い出しながら、僕は電車内で多少マナー違反だが、そいつに話しかけていた。

「なあ、前からちよつと疑問なんだけどさ、『ダイハード2』っ

て映画見た事有るか？」

「ああ、有るよ。それがどうした？」

「あの映画でよ、主人公のブルース・ウィリスが演ってるジョン・マックレーンがさ、飛行機の中でちよつと動いた時に懷の拳銃が見えてさ、横にいるおばさんが警戒して、その後に『大丈夫、刑事です』みたいな事を言うんだけどさ、これっておかしくないか？」

「？ どこがだ」

「だってよお、いくら刑事だろうとよ、飛行機の金属探知機をパスして機内に拳銃を持ち込めないだろうが？ それともアメリカじゃ当たり前なのか？ 怖いな銃社会アメリカ」

「それだったら、『キル・ビル』でさ、ユア・サーマンは日本刀を持って飛行機に乗っていたぞ、映画の中のそういう部分をつっ込んだらキリが無いだろうが」

「だーかーらー、もっとそういう細部に凝った作品を作って欲しいんだよ、俺は。あいつら何億も使ってたんだろ？ ジョークかどうか知らんが、外国映画の日本描写は酷いぞ」

「はは、確かにな」

「んで今日見る映画は何だっけ？」

「視力を失った兵士が、それでも愛国心に燃えて眼が見えないことを隠して出兵する戦争映画」

「んな、ナンセンス映画見る訳？ 眼が見えなきゃ蜂の巣じゃん、それに視力試験とかどうやってパスすんの？ もうちよつとマシな物観ようよ」

「意思を持ったバイブが、無差別に人を襲って食べる映画を文化祭で上映したのはどこの誰だったかな」

「面白かったぜー」

「客は午前午後合わせて五人だったんだろう？ マッド・バイブレーションって何だよ、B級映画どころじゃないぞ、ZだZ級！ 自分の金じゃないからって無駄に使いすぎだって、映画を舐めんな」

傍からみると口げんかをしているようにしか見えないだろうが、これが日常のやり取りだった。

つつい熱くなりがちだが、決定的な喧嘩なんて無い。剛速球でキャッチボールを楽しんでいると言った所か。

それにしても最近の映画は結末が予測できる。

わざと結末に意表をつく形を持ってこようとしている作品だと、そのせいで中盤のストーリーがグダグダだったりする。

まっとうな作品のラストシーンは、もう大抵のパターンが分かる。部活で映画研究部なんぞに入っているくらいだから、映画に詳しいんだろつと言われるが、別にそれは関係ない、それ以前から映画は好きだ。

それにしても、いい加減、結末を期待に胸振るわせるほどの作品に出会いたい物だった。

映画が始まって五分。

僕はポップコーンを片手に着席していた、飲み物は飲まない、トイレに行きたくなってしまうからだ。

一番の見所は既に終わっていた、それは映画が始まる前の別の映画の宣伝だった。

何でこういう宣伝だけ見ると恐ろしく面白そうなのに、実際に見ると拍子抜けしてしまうんだろうか。

まあそういう風に作っているのだから仕方ないといえば仕方ない。

映画が始まって十分。

多少苦痛が襲ってきた。

主人公の愛国心は分かるが、それを前面に押し出しすぎの勘がある、戦争扇動映画かこれは。

たぶん、こういう映画のラストは、主人公は命を失うパターンが

多い。

ハッピーエンドなら良いってモンじゃないが、主人公が死ねば良いってモンでもない。

映画が始まって三十分。

いよいよ強敵が現れた。

映画の敵の事ではない、映画の中ではまだ淡々と戦場でのあれやこれやを解説している。

映画を観る上で強敵である睡魔が襲ってきたのだ。

強烈な睡魔だった。

さすがにいびきを掻いて寝るとは思えないが、万が一の場合もある。

それにすっかり寝てしまって、それを隣の奴に見咎められると、映画が終わった後にメシを食いながらまた「映画を舐めんな」と言われかねないので、気を引き締めた。

それにしても眠い。

昨日ちゃんと眠ったはずなのに眠い。

睡魔を撃退するには、外の空気を吸うとか他にも色々と作戦は有るが、それは全て映画館の中では不可能な事ばかりだ。

(眠い……、やべ……、落ちる……)

ついに、その強敵は意識の大半を蝕み、僕はとうとう眠りに落ちてしまった。

一体何分眠ってしまったのだろうか。

僕が眼を覚ますと、周囲に人の気配がまるでしなかった。

映画館の中は暗いままだが、周囲を見渡しても誰もいない。

横に座っていた友人も薄情にもいない、普通友達が眠っているからといって置いていくか？

それにしても妙だった。

映画はまだ上映しているのだ。

それなのになんで誰もいない？

おかしい。

何かがおかしい。

まだ夢を見ている？ いや、さすがに夢と現実の区別くらいは付く分別ある高校生だ。

じゃあ、何で誰もいない？ どのような説明が付く。

その時だった。

「助けてくれええっ！」

声が響いた。

聞き覚えのある声。

友人の声に聞こえた。

しかし、肉声というよりも何か妙な声だ。

まるで映画の中から響いてきたような

僕は映画に視線を向けた。

戦争映画だ。

さっきまで観ていた続きがそこには流されている。

だが違う点がある。

この戦争映画には日本人が出ているはずが無い。

たまにこういう映画でも端役で日本人が出演する場合も有る、この戦争はベトナム戦争を題材にしているのだから、多少は出ていてもおかしくは無い。

だが、あんな格好をした兵士なんているわけが無い。

あんな格好というのはつまり、現代の日常で来ている服装の事だ。

映画の中の泥まみれの戦場に、軍服姿の米兵に紛れて何十人、いや何百人もの現代風の日本人が紛れているのだ。

は？

一瞬、僕の思考が停止した。

どう言う事だこれは。

まるで……

昔観た映画で、ラストアクションヒーローという物がある。

少年が魔法のチケットで映画の中を出入りできると言う物だ。

まさにこの状況は

その日本人の群れの中に僕は一人の顔を見つけていた。

知り合いの顔。

泥まみれの顔だった。

その顔は恐怖に歪んでいる。

一緒に映画を観に来て、さっきまで横にいたあいつだ。

さっきの「助けてくれ」はまさしくあいつの声だったのだ。

どうする？

助けを呼ぼうにもどういう手段もない。

映画の上映を中止させれば戻るといふ保証も無い。

本当にこれは夢じゃないのか。

とりあえず

僕は席に座りなおして、ポップコーンを口に頬張った。

周りに一切気兼ねする事など無い、大きな音を立てて噛み砕いた。

この映画の結末だけはさすがの僕も予想できなかった。

胸が高鳴った。

ノックの話 1

とん、とととん。

独特なノックの音が響いてくる。

一回叩いて、僅かの間を置いて三回連続で小鳥が木を突付くように叩いているのだろう。

今年で24歳になる会社員の緒方浩次は、トイレの便座に腰掛けて携帯を弄りながら、その音に顔を顰めた。

場所は駅の公衆トイレ。

時間は朝の通勤時間帯である。

この時間帯のトイレは混雑している、特に個室に殺到する人間は切羽詰っている、少しでも余裕があればわざわざ並んでまで駅のトイレを利用しようとはしない、限界ギリギリで他のトイレを探す余裕も無い人がここに集う。

その中で、一つの個室の中で用を足す訳でもないのに、そこに座っている緒方は明らかにマナー違反だった。

緒方はひねくれている。

人が使いたくて堪らない時間帯に、その場所を占有しているという事に優越感に似た物を感じて、楽しんでいるのだった。

会社では無能呼ばわりされて、蔑まれている自分が座っているこの空間に、入りたくて入りたくて堪らない奴らが外にいるという快感を感じているのだ。

彼にしても目立ちたくないのに、何時間もいるわけではない、それにそんな事をしていたら会社に遅刻してしまう。

実際、緒方は本来会社に合う時間よりも三十分は早く家を出ている、そしてその時間の大半をこのトイレで消費する。

会社に行く時間を早めてまでわざわざこんな事に時間を費やして

いるのが根本的な間違いのように思えるのだが、酒も煙草もギャンブルもやらない彼の数少ない憂さ晴らしだった。

それにしても、今まで１０分以上も居座っていても誰もノックなんかしなかった。

もしかしたら、トイレの中で用足し以外の事をしているのがバレたのだろうか。

いや、携帯のゲームで遊んでいるのだがそれも音も消してやっているし、トイレの扉でボタンの操作音なんて聞こえやしないだろう。よほど焦っている奴が外にいるのだ。

そう考えると緒方は笑みを浮かべていた、あまり人に好感を持たれない笑みだ。

会社ででかい顔をしているような奴だったら良いのに

そう思いながらも、緒方は席を立った。

用は足していないが、偽装の為にわざわざ水を流して外に出た。

外には行列が出来ている、一体誰がノックをしたのか？

緒方はざっと見たが、皆はドアから離れた場所で並んでいる。

個室は全部で４つ備えられていて、入りたい奴はそのドアの前じやなくて、少し離れた場所で待つて、空いた場所から入っていくという形の並び方だ。

個室トイレが一つならばともかくこれだけの数があるのに、ノックをするほど限界ギリギリの表情の男は見当たらなかった、緒方は内心がっかりしていた、惜しい物を見逃した……そう考えているのだ、きつとさつきノックした奴は他の個室に入ってしまったのだろう。

緒方は朝の楽しみを満喫すると、そのまま会社に向かった、今日も一日憂鬱だった。

緒方は会社のトイレに座っている。

勤務中なのだが、事有るごとに彼はトイレに入り浸る。

存在感の薄いほうなので比較的気づかれにくいが、上司も馬鹿ではない、それを全て把握している、トイレに行く事自体は生理現象なので咎められないが回数が多すぎる、注意すべきなのだろうが上司はつきり物をいう性格ではなかった、だが、きっちり彼の事を見てそして評価をしている、その査定がボーナスにもしつかりと響いている。

緒方は、自分がトイレに行き時間を潰してサボっている事は、上司に気づかれずに上手い事やっているつもりなので、何で自分のボーナスが低いのか納得できずに憤慨する場面も有ったのだが、上司に食いつくほどの威勢の良さは彼には無く、ただその憂さを別の場所で晴らすだけだった。

トイレの中で彼は、後5分くらいは時間を潰しても平気かな……とか考えていた。
その時だった。

とん、とんとん。

聞いた事のある独特なノックの音だった。

朝、駅で聞いたのと同じノックなのはすぐ分かった。
まさか。

会社の奴だったのか。

緒方は驚きながらも、それと同時に疑問を抱いた。

何でノックするのか？

この会社のトイレには個室が3つある、緒方がトイレに入った時には誰もいなかった、その中で緒方は中央の個室に入っている、だから誰かが隣の個室に入ればすぐに分かる、だが、そんな気配はなかった。

それなのに

（こいつは、空いているトイレに入ろうとせずに、何でわざわざ俺のトイレをノックするんだ……？）

上司か？

サボっている事がバレて、「おい緒方、いつまで時間を潰しているんだ？」とか、注意するつもりなのだろうか？

緒方は、恐る恐るノックを返した。

少なくとも、トイレに入っていれば、中で何をしていようと小学生じゃないんだから上からとか覗かれたりはしないだろう、だからサボっていた事はバレない、それが緒方の理屈である。

だが。

応答が無かった。

緒方は、してもいないのにまたトイレの水を流して、静かにトイレのドアを開けた。

奇妙だった。

誰もいない。

もっと奇妙なのは、左右の個室のどっちにも誰も入っていないのだ。

（何だ……？）

誰かが走り去る気配も無かった。

一体誰がノックしたんだろうか。

緒方の頭はその疑問で一杯になった。

だが、解決する事も出来ず、奇妙な疑問を抱えたまま終業時刻を迎えていた。

帰りの電車の中でも、緒方は今日の事を考えていた。

緒方は、混雑気味の電車の窓際に立ち、外の景色を見ながら今日のことを思い返していた。

一体何がどうしたのか。

考えを整理してみた。

まず一つ。

駅のトイレでノックした奴と、会社のトイレでノックした奴は同

一人物か否か。

確証がどこにも無い。

ノックの音は独特だったような気がするが、今から考えると本当に同じようなノックだったのか曖昧だ、ただ似たようなノックだったのかもしれない。

仮に同一人物だとしたら、一体誰なのか考えたが該当する奴はまるでいない、そんな悪戯心を持った人間はいないし、それほど手の込んだ事をしそうな粘着質な奴も思い当たらない。

駅のと、会社のとが別人だとしても、会社でのノックは奇妙だった。

あれはどう説明する？

自分が注意深く聞いていなかっただけで、ノックだけしてトイレを出たのかもしれない。

何の為に？

理由は思いつかない。

緒方の頭の中がこんがらがった。

その時だった。

とん、とととん。

誰かが緒方の背中を叩いた。

指で突くようにして。

緒方は、心臓が跳ね上がるのを自覚した、そしてそれと同時に確信した。

これは……、間違いなかった。

緒方の頭の中で全てが繋がった。

朝のも、会社のも、同じ奴だ。

そういう確信が今持てた。

そいつが今、自分の後ろに居るのだ。

緒方は振り返ったが、知った顔は一人もいない。

混雑しているので、誰かが自分の背中を叩いて身を隠そうとして動いたら、逆に目立つ。

そんな奴は一人もいなかった。

一体どうなっているのか。

緒方の予想では、振り返ったら会社の同僚がいて、「驚いたか？」とか言うのを予想していたのに、会社の奴どころか見たことある顔が一つも無いとは

だが、誰かが、この中にいる誰かが間違いなく今自分の背中を突付いたのだ。

害は無いが、気分が良い物ではない。

悪戯を越えて、もう嫌がらせに近い、しかも駅や電車の中だけならともかく、会社のトイレにまで来るなんて異常のレベルに達している。

緒方は誰とも分らないので、視線に映る全員に睨みつけるような視線を向けた。

乗客は、皆が一樣に疑問符を頭に浮かべているようだった。

電車は普段とは奇妙な空気を乗せたまま、黙々と目的地に向かっている。

緒方は、家族とマンションで暮らしている。

父は他界し、母とそして1歳上の兄と同居しているのだ。

「ただいま」

暗い声でそう言うと、家の奥の方から「おー、おかえり」という兄の声がした。

今日はおかしな一日だった。

何か人に恨まれるような事をしただろうか？

そりゃあ、朝のあの時間のトイレをちょっとだけ長い時間使っただけ、その程度の事で嫌がらせをされる筋合いは無い、緒方は

そう考えている。

「兄貴、メシは？」

兄はテレビを見ながら。

「母さん旅行でいねえんだから、外で食って来いとか言われただろ？」

と答えた。

「聞いてねーよ」

「そりゃお前が悪い」

「はいはい」

とりあえず、家にある物を食べようか、外で買ってこようか緒方は一瞬迷ったが、今日はコンビニでも行って、何か適当に食べる物を探そうと思った、金は多少ある、コンビニで財布の中身を気にしない程度には、だが。

とりあえず着ているスーツを脱いで、私服に着替えてまたすぐ緒方は玄関に向かった。

わざわざ行ってきましたも言わなければ、兄も弟に対して行つてらっしゃいと言わない。

ドアノブに手をかけようとした時だった。

とん、とととん。

誰かがドアを叩く音がした。

一瞬、身が竦んだ。

飛び上がりそんな恐怖が緒方に突き刺さっていた。

誰かが、ドアのすぐ前に……いる。

しかも、それは駅で自分の背後に立っていた奴であり、それはつまり

家の場所まで知られていて、わざわざ家までやってくるようなそんな異常とも言える行動力を持つていることを表して……。

ドアを開けるべきか否か、あるいは、今ここですぐにドアを開

けて、「誰だ！」と叫べばそれで済む事かも知れない。

ただ、怯えてドアを開けないという行為を選択すると、これから何日間も同じような体験をしなければならぬかもしれない。

どうすべきか。

もう、こんなモヤモヤした気分で過ごすのはまっぴらだった。

緒方は、迷いながらも普段は滅多に見せない勇気を振り絞って、その扉を勢いよく開けた。

だが

そこには誰の人影も無かった。

またエレベーターも近くにあるがそれも稼動しておらず、誰かの足音も聞こえなかった。

確かに、死角はいくらでもある、足音もゆっくり歩けば聞こえないだろう。

だが、どうにも釈然としなかった。

緒方は、奇妙な恐怖に生唾を飲み込んだ。

ノックの話 2

会社員、緒方浩次^{おがたこうじ}は、食欲の減退を感じながらも、コンビニに向かう事にした。

周囲に警戒を怠らないようにしている、あのノックをしてきた奴（トイレの事から考えて男には違いないだろう）が、どこから自分を見ているのか分かった物じゃないからだ。

あのノックだけなら薄気味悪いだけで、直接的な害は無いが、いつ直接的な害が襲ってくるか分かった物じゃない。

だから、普段は何気なく歩いている徒歩五分くらいのコンビニまでの道のりを、まるで戦時中のように慎重に緒方は歩いていた。

コンビニに着くとホッとした。

人がいて、明るい場所はこれほどまでに人を落ち着かせるのかと思った、そりゃ虫にしても灯りに集まる訳だとか思っていた。

急に食欲が湧いてくるのを緒方は感じていた。

（今日は何を食べようかな？ カップ麺か……、いやパスタとか弁当でも良いな、ついでに食後のデザートも買うか）

など、考えていた。

でも、食べ物よりも、何故か雑誌コーナーに向かうと、当たり前のように緒方は今日発売の漫画雑誌を立ち読みし始めた。

不思議な事に、学生時代は毎週買っていた漫画雑誌も、大人になってからは買わずに立ち読みで済ませてしまっていた、その雑誌の中の幾つかだけに興味が有って、それ以外は読まないで金を出すのが割に合わないと考えるようになったからだ。

いつも見ている漫画は、やはり面白い。

これと、あと二つほど漫画を見たら夕食を買って帰ろう。

緒方がそう思った時だった。

こん、こっこん。

ガラスを叩く音が耳に届いた。

独特な、それでいて既に聞き慣れた音だった。

思わず手に持った雑誌を落としてしまいそうなほど、緒方は驚いていた。

そしてすぐに雑誌から顔を上げて、窓の外に眼を向けた、しかしそこには誰一人として見当たらなかった。

時間にして二秒もかからずに、顔を上げたというのにどうして誰もいないのか。

緒方はお気に入りの漫画が与えてくれた高揚感を打ち消すほどの疑問、いや恐怖を味わっていた。

首には嫌な汗が、運動時に出る爽快な汗ではなく、下痢腹を抱えてトイレに蹲つすくまっている時に吹き出るような汗が滲にじみ出していた。

完全に食欲が失せていた。

緒方は、逃げるようにして雑誌を放って、コンビニを出て家に向かって走った。

全力疾走だった。

脇腹の痛みを感じたが、それはどうでも良かった。

誰かが近付いてこようとしても追いつけないほどの速度で走らなければならぬのだ、誰かの悪戯だとしたらそれは成功している、このような滑稽な姿で走っている自分を見たらそいつは満足するかもしれない、そういう淡い算段も緒方の中にはあるのだが、それはただの言い訳で、本当は怖くて怖くて堪らないのだった。

走らなければ、体を動かさなければ、どうにかなくなってしまいそうだった。

マンションに辿り着いても、エレベーターという密室に入るのが異常に怖く感じ、三階の自宅まで階段を駆け上った。

息が切れている。

普段は運動など滅多にしないから、足ももつれている、だがそれでも止まるよりは遥かにマシだった。

家の前に来て、ドアノブを回そうとした、ちょっとした買い物のつもりだったから、鍵など閉めていない。

だが

鍵がかかっていた。

これはつまり……

（兄貴！^{あのやろう} どうかに出かけやがったのか！？）

緒方の兄は、さっきまでテレビを見ていたが、良く思い出せば家で寛ぐ格好ではなく、どこかに出かけるような格好をしていた気がする、だがそれにしても、緒方が家を出てからまだ10分も経っていない、それなのにこんなにタイミングよく家を出る物なのか。

もちろん緒方のポケットの中には、家の鍵が有るので問題無いが、こういう精神状態の時に一人で家にいるというのは想像しただけでも耐え難い物がある。

だが、家の前でジツとしていると、背後から誰かが飛び掛つてきそうで怖い、まるでトイレを我慢していて慌てて家の鍵を開ける時のような必死さで、緒方は家の鍵を開けて、飛び込むようにして家に入った、そしてすぐに鍵をかけた。

とりあえず、これで安全だろう。

家は知られていても、これで中には入ってくる事は無いはずだ。

緒方は思わず、安堵のため息を漏らしていた。

玄関にへたり込みそうになったが、背後からまたあのノックの音が聞こえてきたら、心臓に悪すぎるのですぐに家の奥に向かって、そして不安を打ち消すようにテレビをつけた。

いつものテレビ音量よりも5つほど高い音にしていた、その音が家の隅々まで染み渡って怖い物を隠してくれそうな気がしたからだ。テレビの中ではお笑い芸人が楽しい空気を発していて、緒方は救

われたような気分になっていた。

今日はもう、熱い風呂に入って、すぐに寝てしまうに限る、そう思った。

風呂は自動で沸くようになっていたので、とりあえず”おいだき”ボタンを押して、またテレビを食い入るようにして見た、テレビに集中すれば、他の怖い事など考える余裕など無くなると、そう考えているように見えた。

熱いシャワーを浴びて、その熱が全身に染み渡ると、今日一日あった事が嘘のような爽快感を緒方は感じていた。

そして冷静に頭を働かせ始めていた。

多分、気のせいじゃない。

勘違いの類でもなければ、ちょっとした悪戯のレベルでもない、でもじゃあ何なのかと考えるとまるで想像が付かない。

あつ、と緒方は一つの考えを思いついていた。

これはまさか

会社で働きの悪い自分を、こうやって追い込んで精神的なストレスで自主退社させようと、そう考えた会社の連中が仕組んだ事じゃないのだろうか。

緒方が勤めている会社は、そこそこ大きい。

聞いた話じゃ、会社と言う物は会社自体が経営を存続できないほどの状態か、あるいは社員に著しい問題が無い場合以外は解雇を言い渡せない物らしい、会社側からのそういう要求は色々ややこしい問題が付き纏うのだという。

だが、自主退社となれば話は別だ。

本人の希望なので、会社側は、それまで勤めてきた分の退職金を支払ってサヨウナラだ、それで済む、今後何年も無能な社員を飼って、バカ高い退職金を支払うよりはずっと安く済む。

そういう考えではないだろうか。

よく考えれば、今までの全てがほとんど害が無い、これは例え見

つかったとしても、悪戯でしたとか言い訳する為じゃないのだろうか、実害が無いのだから訴えようも無い。

ということは、そういう無能社員を辞めさせる為の部署があつて、それが動いているのか？

とか、漫画染みた事を緒方が考えていた時だった。

とん、ととん。

その音が風呂場のドアを叩いた。

一瞬、熱い湯が冷水に変わったような気分を味わっていた。

これは、違う……。

会社絡みとか、そんな次元じゃなく、もっと異質な何かだ。

会社がここまでするとは考えられない、明らかな不法進入である。何なのか、一体何が自分の身に降りかかっているのか。

少なくともノックしてきた奴は、鍵のかかったこの家に入っている事になる。

それは堪らなく恐ろしい。

しかも、ノックだけで、声も聞こえなければ他の一切の行動が無いのも逆に恐ろしい。

結局緒方は、風呂場で怯えながら、1時間近くもそこで息を潜めるようにしていたが、最初のノックの音から一切のリアクションが無かった。

兄が帰ってくるのが理想だったが、平気で朝帰りをする兄である、当てには出来ない。

もうこうなったら、ヤケだ、と言う事で思い切って外に出たが、誰の気配も無ければ家の中が荒らされた形勢も皆無だった。

何がどうなっているのか。

その得体の知れなさに、益々深い恐怖を抱きながらも、緒方は濡れた体をバスタオルで拭き取って、衣服を身に着けていた。

家はもう、落ち着ける場所ではなかった。

誰かが、家の中にいるかもしれないと思いながら、布団に潜ることなんて出来っこない。

緒方は、護身用に手に調理用の包丁を握っている、気休めくらいにはなるだろうし、相手に対しての威嚇にもなる。

家の隅々をくまなく探した、時には息を呑むほど恐ろしかったが、それでもあちこちのドアを開け、襖ふすまを開け、ベッドの下まで覗き込んだが、どこにも誰の姿も無い、そもそも人が隠られるような広さの家ではない、誰かが隠れていればすぐに分かるはずだ。

窓の鍵を見たが、どこにも破られた形跡も無い、玄関も同様だ。

緒方は奇妙に思いながらも、全てが自分の思い過ごしではないかと思っていた、いや、そう思いたかったのかもしれない。

僅かにホツとしたら、緒方は急に喉の渴きを覚えた。

冷蔵庫に向かって、その扉を開こうとした時だった。

とん、ととん。

冷蔵庫の中から音がした。

冷蔵庫は、人が入れるようなスペースは無い、少なくとも緒方の家の冷蔵庫には無い。

母が買い置きをする性格なので、中には他の物がぎっしり詰められているはずだ、それなのにノックの音がする……

「うわああっ！」

緒方は悲鳴のような叫びを発しながら、その扉を開いた。

だが

やはり、何も無い。

緒方は、眩暈がするほどの恐怖を味わっている。

自分は今まで、人為的な物ばかり考えていた、誰かの悪戯だとか、会社の策謀だとか、だが、それらは完全な思い違いだったんじゃないのか。

完全に考える視点が違うのだ。

これは、人為的なものじゃなくて、あるいは
そう考えると怖さが倍増しそうなので、緒方は必死にその考えを
打ち消そうとした。

恐怖とはすなわち想像力である。

想像力の無い人間には恐怖など無く、自分が生み出す無限大の想像の恐怖を打ち消すほどの勇氣を持っていれば、あるいはそれを防げるかもしれないが、残念ながら緒方にはその恐怖に抗うほどの勇氣など持ち得なかった。

逃げ出したかった。

家から逃げ出し、どこか人のいる場所へ行く。

だがどこへ？

ファミレスに行くにしても、コンビニに行くにしても、あるいは
漫画喫茶に行くにしても、友達の家に行くにしても……

外に出るという事が堪らなく怖い、暗闇が自分に牙を剥いて襲い
掛かってきそうな予感すらする。

だが、家にいるのも怖い、物陰に潜む”何か”が、自分を狙っている視線を感じるような気がする。

では、どうするのか。

寝てしまふ。

全ての考え、思考、想像を停止させて、夢の中に逃げ込む。

それが緒方に出来る、数少ない恐怖に対抗する術だった。

布団を頭から被って、一切の世界との断絶を試みた。

祈るようにして、次の日が来るのを緒方は願った。

(ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい……)

緒方は、全てに向けて謝っていた。

自分が何をしたのか、何故こんな目に合ったのか、理解できない
がとりあえず相手の気が済むのならいくらでも謝る、謝るだけで済む
ものならば土下座だって厭いとわない、哀願に近い感情を緒方は布団の

中で念仏のように唱え続けていた。

その時だった。

布団が押されたのだ。

力一杯ではない、軽い力だ。

その押す力が、何というかりズミカルで、というよりも、それは今日だけでもう何回も体験した

とん、とととん。

という感触のような……

「ひいひいっ！」

情けない悲鳴を緒方は発していた。

だがもう恥も外聞も無い、その押す力は、一つの部分だけではなく、布団のあちこちで同時多発的に発生しているのだ。

とん、とととん。

とん、とととん。

とん、と

ととん。

とん、とととん。

とん、とととん。

とん、とととん。

とん、

とととん。

とん、とととん。

とん、とととん。

発狂してしまいそうだった。

そのように追い詰められた時、人の行動のバリエーションは極端に少ない。

拒否か、あるいは

緒方は後者を選択した。

「ふざけんな！ そんなにノックしやがって！ 入りたいなら勝手に入りや良いだろうが！」

緒方は叫んでいた。キレたという表現が正しいのかもしれない、人が追い込まれた時、その状況を破壊してしまうような衝動的な行

動、緒方が取ったのはまさにそれだった。

叫びながら布団を蹴っ飛ばして、外に飛び出すようにして布団からその身を出した。

そして辺りを見渡した。

だが、まるで今までの全てが嘘のような静けさに包まれていた。

誰の姿も無い、何の姿も無い。

ただのいつもの自分の部屋だ。

「は、はははは……、ははははは……、はは……」

緒方は思わず笑ってしまっていた。

あれだけ怯えさせといて、こっちがちょっと強気に出たら消えてしまっ、そういうモノなのかと思った、それだけのモノだったのか。そんな物に自分は怯えていたのかと思うと、もうこれは笑うしかない。

緒方は全てが消え去ったように安堵した。

その時だった。

「うん、そうする」

どこからかポツリと声が聞こえた。

それは耳元で囁かれたようであり、また遠くから聞こえたようでもあり、幼い女の子の声のようでもあり、年老いた老爺のようでもあり、またそのどれでもないような声だった、ひどく抽象的な声で、まるでその言葉が記号として頭に放り込まれたような印象すら感じる声だった。

その言葉の意味、緒方には理解できなかった。

まさかそれが、咄嗟に自分が言った「入りたいのなら勝手に入れ」の答えだなんて、思いもよらなかった。

とん、ととん。

またノックの音が響いた。

どこからでもない、緒方にとって地球上で最も近い場所からのノック音である。

耳が聞こえなくなった人でも、頭蓋骨に直接音を響かせると声が届くという、まさにその振動が緒方に響いたのである。

それはつまり

そして……

扉は開かれた。

翌日、酒を飲み朝帰りをした緒方の兄が見たのは、異様で無残な弟の死体であった。

その死体は、どういう事をされたらそうなるのか、いや、難しい事ではない、単純な事だというのは分かるが、その方法がまるで見当が付かなかった。

そう、もっとも適した表現があるとするならば、”引っぺがされて”いるのだ。

緒方は、布団に顔を蹲かたむくるようにしていて、その後頭部のみが兄には見えるのだが、その後頭部の一部分がまるで小さなドアがこじ開けられているようにぱっくりと開いていて、中身が見えるのだ。

それだけでもう弟が二度と自分と口を利く事は無いだろうと悟った。

それにしてもこんな事は特殊な器具でもなければ出来ないだろう、それに少なくとも玄関に鍵はかかっていたし、窓が破られた形跡も無い。

さつきまで飲んでいた酒の酔いが、一瞬で覚めていた。

一体、何が起こったのか。

その時だった。

完全に言葉を失っている緒方の兄の肩を誰かが叩いた。

とん、とんとん。

完。

ノックの話 2（後書き）

予想より、ちょっと長くなってしまいました。

途中の文章、携帯ではちょっと読み辛いかもしれませんが、すい
ませんです。

夜道の話

私、水野未来^{みずのみく}は一人、会社帰りの夜道を歩いていた。

いつも通る、駅から自宅までの道は人気^{ひとけ}が無くて寂しい通りだ、今の所まだ誰か襲われたりしたという話は聞いた事が無いが、自分がその第一の被害者にならない保障なんてどこにも無い。

送ってくれる彼氏でもいれば良いのだが、残念ながら今年で24歳になる私に彼氏はいなかった。

以前はいたのだが、性格の不一致というありきたりな理由で別れたのだ。

今思えば、少し惜しい事をしたというような気分もするのだが、そのような事を考えるとどうにも自分が浅ましく未練がましい人間のように思えてしまうので、なるべく考えないようにしている。

ちょっと気を抜いたら、寂しい時に別れた彼氏にメールを送ってしまいそうだから、もう完全にメモリーから削除している。

出来るだけもう昔の事は考えないようにしている。

後ろ向きの事ばかり考えていても仕方ないし、気分も沈むだけだし。

それに出会いはまだこれからいくらでもある……はずだし。

それにしても本当に、この道は人の通りが無い。

誰かいたらいたで怖い、誰もいないというのも怖い。

一応女の一人歩きと言う事で、防犯ブザーを持っているのだが、これが非常時にどれほど効果を発揮するのだろうか考えると疑問だ。

そもそも、その音で相手が驚いて逃げなかったらどうにもならない、どれほど激しい音が響いた所で、それを聞く人間がいなければ

誰も助けになど来てくれないだろう。

日本の治安は良いとは思うけど、それでも犯罪者はまったくいない訳じゃない、用心に越した事は無いが、それだったらもっと明るい大通りに面した場所に住めば良いと気軽に言う人があるかもしれないが、物件が無いのだからしょうがないじゃないと思うしかない、会社から近くて家賃がこれほど手頃な家は他にはそうは無いのだ。

それに最近は安月給の割りに仕事が忙しく、満足に新しい家を探すほどの時間すらも無い、引越する為の時間もそれに関係する役所への届けとか、そういう事を考えると眼が回る。

もちろん、自分の身を一番に考えるのならば、すぐにでも有給でも取って新しい家を探すべきかもしれないが、人は常に最善の行動が出来るとは限らない。

もしも、人が全て最善の行動を取れるのならば、世の中の全てが上手く行くだろう。

だが、そう上手くは行かないのだ。

食べ過ぎが良くないと知っていながらも、好物が出たらそれが体に悪かるうと食べてしまう。

飲み会で、楽しすぎて飲み過ぎが良くないと知りつつも、がぶ飲みして二日酔いに悩まされてしまう。

早朝のランニングをすれば健康が保たれると思うが、睡眠とどちらが重要かの天秤に掛けたら、圧倒的に睡眠が勝ってしまうだろう。そう言う物なのだと思う。

実際に、一度でも怖い目に合えば考えが変わるかもしれないが、幸いにして今までそのような体験はした事が無い。だから、まだ引越し計画は未定だ。

そこで私はようやく気が付いていた。

いつの間にか背後から足音が響いてくるのだ。

（誰かが……尾けてきている）

いや、それはちょっと過剰反応かもしれない。

たまたま同じ道を歩いているだけの人も思ったのだが、どうにもその視線を首筋辺りに感じてしまう。

自然と歩行速度が少し上がった。

後ろの人（男だか女だか分からないが）、もしかして自分の事を怖がって早歩きになったんじゃないか？ とかちよつと気分を害したとしても、それよりも遥かに自分の身の方が重要だった、名前も知らない人にそこまで気を使っている余裕の有る場面でもない。

さらに未来の歩行速度が、小走り程度に速^みまった。
すると

後方の足音も、僅かにだが早まったように聞こえた。

これは勘違いの部類なのだろうか？

いや……

仮にそうだとしてもそう考えてはいけない気がする。

トイレや急用で急いでいるなら最初から走る、私が走ってからその速度を上げたのは間違いない、そうなると思えられる事はそう多くない。

私は失敗したと思った、こういう道だと携帯電話で話しているフリをしながら歩けば、襲う方も躊躇うと聞く、そうしておけば良かったと思った。

だが、全てが後の祭りだった。

私は、咄嗟にポケットに潜ませている防犯ブザーに手を伸ばしていた。

まだ、鳴らすべきかどうか分からない。

勘違いならば大恥だ、それに自分だけでなく周りにも迷惑がかかる。

これがもしも、もう少し治安の悪い国であれば、彼女は当たり前のように防犯ブザーを鳴らしていただろう、いや、そういう国ならば危ない場所には近付かず、近づくにはそれなりの武装をして行く

だろう。

平和な国と呼ばれている日本だからこそ、か弱い女性でも、身の危険を感じていながら防犯ブザーを作動させるのさえ躊躇われたのだ。

走って逃げられるのならそれに越した事は無い、そう思っただけで済んでいた。

一種の思考の麻痺であり、明らかな判断ミスであるのだが、良いように考えれば、これだけ走って追いかけてくる相手が、防犯ブザーの音程度で怯むかどうか、逆に興奮して酷い眼に合わされる可能性もあるかもしれない。

その点だけ考えれば、逃げる事が得策かもしれないが、防犯ブザーを鳴らしながら走っても良かったのだ。

背後から迫ってくる足音は、どんどん自分に近づいて来る。怖かった。

何で自分がこんな目に合うのかと思った。

買い物途中に、車に撥ねられた主婦が、宙を舞っている間に考えそうな事を考えていた。

背後からは、とうとう足音だけでなく鼻息まで聞こえてくるようだった。

はあ、はあ、はあ、はあ、はあ……

女の物ではない。

明らかに男の息の吐き方だった。

もうかなりの距離を走った、もっともかなりの距離と言っても、まだ1kmには全然届かない程度の距離だ、だが普段運動していない女性にとっては気の遠くなるような距離を走っていた。

(も……、もう走れな、い……)

息が切れ、吸う息も吐く息も荒い。

汗も恐怖と運動により大量に流れ、ファンデーションも汗で流れ

始めていた。

足が纏れて、そのまま転んだ。

その時に、膝を軽く擦って、小学生の時によく経験するような傷を負っていた。

一度転んで、もう一度起き上がって逃げ切れる自信なんて無かった。

背後から迫ってきた人物を見上げた。

夜道なのでほとんど輪郭しか顔は分からない。

男であることは分かる。

服装と体格で何となくだが分かる。

そこそこの距離を走ったにもかかわらず、息がまるで上がっていない。

「た……助け……」

掠れた声で助けを求めるのだが、男は微動だにしない。

はつきりとは分からないが、右手に何かを持っているように見える。

凶器!?

防犯ブザーを鳴らすという発想はどこかへ吹っ飛んでいた。

それをした所で、誰かが駆けつけても、圧倒的に全てが手遅れだろう。

駆けつけた誰が見るのは、無残な自分の死体だけだ。

その時だった。

「　　った」

男は何かを呟いた。

私の耳にはそれがはつきりとは聞こえなかった。

もう一度男の口が開く事は無く、そのまま身を翻すと、闇に溶けるように姿を消していた。

一体何がどうなったのか。

よく分からないが、助かったらしい。

安堵のため息を私は深く吐いていた。

体が信じられないくらいにガクガク震えていた。

体中の肉体的・身体的緊張が解けたからだとは分かるのだが、それをどうやって抑えればいいのかそれがまるで見当もつかなかった。未来はただ両手で自分の体を抱えるように、その震える体を自ら抱きしめるしかなかった。

10分ほどもそうしていて、ようやく体の震えが収まってきた、だが、それにしてもこれからどうしようか。

警察を呼ぶにしても、実害はほとんど無い。

膝小僧の傷も、自分で転んで作った物だし、追っかけてきた相手の顔も分からなければ、凶器を持っていたという確証も無い。

冷静に考えれば考えるほどまともに取り合ってくれるとは思えない。

それに傷だって軽症もいいところだ、家に帰って消毒さえすれば問題ない。

全てが自分の過剰反応による思い過ごしかもしれない、あの人はただ走っていただけの人で、自分が転んでしまった事に責任を感じて逃げてしまったのかもしれない。

だが

これらはただの言い訳だ。

全てが巧みな言い訳だった。

本心は、もう関わりたくないという想いだけだった。

悪意が無い訳が無い、目の前で女の子が転んでも声も掛けず、手も差し出さずに逃げる相手は何か非があると自分に思っているのに間違いないのだ、その非とはつまり襲おうと考えているとかそういうことだ。

けれども、警察を呼ぶにしても、そうしたらまだ関わりを持つ事となる、そこからまた何か怖い目に合うような気がして恐ろしいのだ。

日本の警察は優秀だと聞くが、それがどれほどの物なのか実感が無い。

テレビで見る分には、不祥事やら不当逮捕の情報ばかりで、それに警察に行ってもまともに相手をしてくれないという話ばかり目にしているの、いまいち助けを乞うような気になれなかった。

私は、汗のせいで冷え始めた体を起こして、一人、家へと向かった。

今日の事は忘れよう。

そう思った。

翌日、テレビを点けると私は驚愕した。

事件の速報が流れていた、通り魔が女性を殺害したというニュースだ。

しかも、現場は昨日私が通った道で

戦慄した。

思わず、手に持っていたコップを取り落としていた。

その瞬間に理解していた。

あの最後の言葉。

あの男が、言った言葉を今ようやく理解した気がした。

「……間違った」

そう言っていたのだ。

あの男は誰かと間違えて自分を追いかけてきたのだ。

右手には想像通り凶器を持って。

もしも、防犯ブザーなどを鳴らしていただろうなっただろうか。

あるいは、暗がりです判断が付かないほどその女性と私が似ていた

ら

間違いに気づかずにあの男は私を殺したのではないだろうか。
間一髪だったのだ。

昨夜、確実に自分の頬を『死』が、その冷たい手で撫でていったのだ。

ただ、幸運だけで今自分はこうして息をしていられるのだ。

私はすぐに会社に電話して、風邪だと嘘をついて病欠した。

上司は電話口で機嫌悪そうに応えたが、そんな物に構ってられない、死ぬ訳じゃないし。

そしてその足ですぐに不動産屋に向かった。

今度の家は、出来るだけ繁華街に近い場所にしようと思った。

それと、彼氏をすぐに作るう。

そう決心した。

炎の人の話

会社員、伊藤浩平いとうこうへいは短気だった。

昔から短気で、そしてそれは今の42歳という歳になってもまるで変わらなかった。

歳とともに丸くなるという常識は、彼にはまるで無縁の話のようだ。

伊藤は産まれて来る時、母親の胎の中に寛容さを置き忘れてきたのでは無いか、そう思えるほどの男だった。

部下に注意する時は、優しく指導するのではなく、頭ごなしに怒鳴る、怒鳴りそして徹底的に貶けなす。

相手の非を正すというよりも、自分の正しさを武器に相手を叩き潰すように怒鳴り散らす。

男女平等の精神の持ち主のようで、女子社員にも平気で怒鳴る、そのせいで何度か女子社員が泣いているのだが、彼はほとんど気にしなかった。

さすがに手こそ出さなかったが、まるで言葉で殴りつけるように怒鳴るのが彼の特徴だった。

正義は我にある。

そういう歪んだ意思が有るように思えた。

自分が正しいのだから、相手には何を言っても構わない、そのような歪んだ理論が彼の中で成立していたのかもしれない。

仕事場だけではなく、日常生活でも瞬間湯沸かし器のように、すぐにカッとして、そして胸の中の物を吐き出すように怒鳴るので、一応結婚していたが、結婚して一年と経たずに離婚が成立している。別れ際の妻の台詞は。

「ペットでも飼って、そいつを怒り続けていれば良いわ、それがあなたにはお似合いよ」

だった。

その言葉にも怒り狂っていた彼だが。
今日はやけに機嫌がよいように見えた。

やった。

やった、ついにやった。

飲み会からの帰り道、伊藤は、思わず小躍りこおどりしたいほどに喜んで
いた。

今働いている支社から、本社への栄転が正式に決まったのだ。

これを喜ばずして何を喜べというのか。

元々、自分の能力ならば本社でバリバリと活躍しているはずだっ
たのだ、それなのに……

つまらない事件で支社に異動させられたのだ、言うなれば左遷だ。
何故、と思った。

自分はこれほど会社に貢献しているのに。

自分ほどの優秀な人材を左遷させた人事の正気を疑った。

それから筆舌に尽くしがたい苦労があった。

まず支社の連中は、やる気が無い。

仕事は遅い、要領は悪い、態度も悪い、それが気に喰わずに何度
も何度も注意をした。

若い奴に何かをやらせるには、徹底的に怒鳴りつけるしかない、
そうやって『教育』していかないと、何も覚ええない愚図グズばかりだか
らだ。

何をやらせても2流以下の仕事しか出来ない職場の連中を、俺が
それなりの仕事が出来るように鍛え上げてやったのだ。

それは根気の要る作業だったがそれをやり遂げたと伊藤は思っ
ている。

だからこそ、この職場の実質的なリーダーの栄転を喜び、皆は今
日の飲み会で心からの笑顔を見せていたのだ。

「良かったですね！」

「おめでとうございます！」

まるで自分の事のように喜んでいようだった。

それを見ただけで伊藤は自分の仕事、家庭を犠牲にしてまでやる価値のあるものだったと誇りに思っている。

伊藤本人はそう思っているが、実際のところは事情が違う。

短気ですぐ怒鳴り。

そして感情的に怒って見たが、実際には伊藤自身のミスであった場合ははぐらかす。

強引な手腕で、部下の功績は自分の物にし、面倒事はすぐに部下に転嫁する。

そのような上司が信頼されるかどうかは、ちょっと考えてみれば誰にでも分かる事だ。

伊藤は本人としてはその支社の実質的リーダーと思い込んでいたが、誰もが心の中で伊藤のことを煩わしく思っていた。

職場の同僚だけではなく、掃除のおばちゃんにまで嫌われている、ここまで嫌われるというのも一つの才能と思えるほど嫌われていた。今回の栄転についても、自分達の周りからいなくなるから喜んでいるのであって、決して出世した事を喜んでいたことではなかった。

本人の自己中心的な思考は、本当にリーダーの資質を持った人間ならばそれが許されるが、実力の無い人間が勘違いでそのような思考に至った場合は始末が悪い、そして往々にしてそのような考えを持つ人間は、自分が周りからどう思われているかを深く考えたりしない物だ。

実際に、会社の人達に言わせれば。

「あの偉そうにして、仕事は全然しないオヤジが、いなくなっせいせいしたわよねえ」

「ああ、昇進みたいな感じで出て行くのが気に入らないけど、近くにいないだけで仕事の能率が違うからね、助かるよ」

「あれで、自分は有能とか思ってたんでしょね、何も出来ない癖にね」

「ははは、憎まれっ子は世に憚^{はばか}る、とはよく言ったもんだよね、まああいつは勘違いしているだけだけどさ」

「本社に行って一体何をするんだろっね、問題起こすのは分かっているけど、もう戻って来ない事を祈るよ」

というのが本音であった。

そうとは知らずに伊藤は電車で揺られ、家路に向かっていった。

その顔には笑みが浮かんでいる。

だが、その笑顔が僅かに曇っていた。

車内が妙に暑かったのが原因だ。

今は、1月である。

だから暖房を利かせ過ぎなのだ、と伊藤は苛立たしく思った。

後で、この鉄道会社に投書してやろうと固く決意した、伊藤は不満に思ったことは必ずそれを訴えるようにしている、以前は現場の人間に当り散らしていたが、幾ら言っても変わらないので、その会社自体に投書するのが習慣付けられていた。

テレビを見ていても、不愉快に思ったことはすぐに投書か電話をする、泣き寝入りなどしなかった。

それにしても暑い。

伊藤の首筋にはじっとりとした汗が滲んでいた、額にも晴天の真昼に外を歩いている時のような汗が流れ始めている。

他の乗客も暑苦しそうにしている。

もわあとした空気が、周囲に淀んでいるように見えるほどだ。

段々伊藤のイライラが高まってきた。

危うく誰彼構わず怒鳴り散らしたくなっていたが、丁度伊藤の停車駅に停まったので、降りられた。

もう少し乗っていたら蒸し風呂状態のあの中ではとても耐え切れなかった。

せつかくの栄転の喜びにケチが付けられたようで、伊藤は不機嫌だった。

伊藤が降りた直後。

その車内には、今までの熱気が嘘のように、ごく普通の温度が戻っていた。

乗客は皆一様に首を傾げたが、その原因は誰にも分からなかった。

伊藤は人通りの少ない裏道を歩いている。

いつもこの道を通る、表通りを通ると5分も余計に時間がかかるのだ、それに若い奴らがたむろしている姿を見るのも嫌だし、礼儀知らずな奴が自分にぶつかってきたりしたらと思うと、とても表通りを通る気にはなれない。

そもそも世の中には馬鹿が多すぎる。

伊藤は常々そう思っている。

自分を見習え！ そう叫びたくなる。

自分のように身を粉にして、会社の為、社会の為に尽くせ、そうでなければ何の為に生きているのか分からないだろうが。

テレビを見て思うが、遊んでいるようにして自分の何倍も稼いでいる連中は、あれはどうしようもない連中なのだ、所詮は堅実な自分には遠く及ばない下等な仕事をしているに過ぎないのだ。

若いちゃらちゃらしている奴らは女の尻にしか興味が無いのか、もっとしっかりとした安定のある仕事をするべきなのだ！

働く為に人は生きているのだ。

働いて金をしっかり稼いで、世の中に貢献するのが常識なんだ！

そう伊藤は常々思っている。

その時、伊藤は喉の渇きに気が付き、ポケットの財布から小銭を

取り出し、近くにあった自動販売機にコインを投入した。

コインが、投入口から転がる音が聞こえた。
だが

何の反応も無かった。

金額の表示も無ければ、商品のボタンに明かりが点^{とも}る事も無かつた。

「何だ!？」

伊藤は機械に文句を付けるように怒鳴ったが、当然機械が反応する訳も無い。

何で、金を入れても機能しないんだ、この機械は!

こうやって小銭を稼いでいるのか、この機械をここに置いた奴は!
伊藤はそう思った。

こうやって、人通りの少ない場所に自動販売機を設置しているのは、そういう魂胆が有るからなのか!?

日本人の大半は、こういう場合は泣き寝入りだ。

わざわざ120円の為に、苦情を言うのを面倒臭がる奴らが多い。
それを見越しているんだ、この自販機を設置した奴は!
性根が腐ってやがる。

伊藤は心の中で毒を吐き散らした。

俺は違うぞ。

そう思った。

必ず後日、きっちりこれを設置した奴から金を取り返してやる。

そう誓って、そのまま腹立たしげに、自動販売機に蹴りを入れた。
ごっ、という鈍い音がしたが、それで何が変わる訳でもない。

だが、伊藤はすぐに顔の向きを変えたから気が付かなかったが、
伊藤の足が当たった自動販売機の部分から、何故か煙が立ち昇^あっていた。

酒を飲んだからか、喉の渴きがいつそう酷くなっている。
ちっ。

そう舌打ちして、伊藤は別の自動販売機を探した、ちよっと歩け

ばすぐに別のが眼に入る。

伊藤は気が付いていなかった。

その異変に。

伊藤の全身から、まるで機関車が蒸気をあげるように湯気が立ち昇っているのだ。

いくら寒いと言っても、伊藤から立ち上る湯気は、まるで冬の馬拉ソンで、選手が完走した直後の何倍もの量が昇っていた。

だが、その異常事態にもかかわらず。

（今年は暖冬だと言っていたが、それにしても暑いな……、飲みすぎたか？）

伊藤は、そう考えていた。

今の自動販売機の件で、伊藤の怒りは段々と増していた。

その怒りは自分が支社に異動させられた事件を思い出させていた。

（笹塚め……！）

伊藤は胸の中でそう呟いた。

あの野郎、俺の部下の癖に何かに付けて俺にケチ付けてきやがった。

だから、何かミスをした時にはその苛立ちを何倍にもぶつけてやったんだ。

俺に意見するのが悪い。

俺の半分も仕事を出来ない癖に、人に何かを言える立場か。

だから厳しくしごいてやったのだ、こっちとしては善意でやった事だ、わざわざあんな教育もまともにされていない奴を教育してやったのだ、それも教育費など会社から支給されるわけじゃないから、ボランティア奉仕活動みたいなものだ。

それなのに、あの精神薄弱な恩知らず野郎が、遺書を残して自殺しやがったのだ。

そこには俺に対しての恨み辛みが延々と書き綴られていたのだ。

それで俺は本社から支社にトばされたのだ。

何故だ。

何故こうも世の中は理不尽なのだ。

努力しようとすれば足元をすくわれ。

人に善意を施したら裏目に出る。

こういう世界が許されるのか。

また、財布から小銭を取ろうとしたとき、指先に信じられない感触が当たった。

一瞬酒のせいで感覚が鈍っていたせいか、硬い感触ではなかった。まるで、溶けかけのチョコレート片に触れたような

「は？」

ドロドロだった。

財布の中の小銭入れの中には、伊藤が知っているコインの形状の物が一つも存在していなかった。

さっき、自動販売機に入れる為に、指を財布に突っ込んだ時には間違い無く百円硬貨が幾つか有ったはずだ。

それが無い。

あれ？

熱いな。

もう、暑いじゃなくて、熱かった。

子供の頃から、何かに付けて怒ると、このように体が熱くなった。それは当たり前前の現象だと思っていた。

漫画で有るように、頭から蒸気を出して怒るような、そんな感じの感覚。

それが、今の伊藤は何倍も、いや何十倍もの熱を感じていた。

胃が熱かった。

アルコール度数の高い酒を一息で飲み干したように熱い。

こんな熱は体験した事が無かった。

インフルエンザで高熱を出した時、これに近い熱を感じた事が有

るが、普通に道を歩いていて多少は腹が立っただとはいえ、こんなにも体が熱くなる事なんて普通は無いはずだ。

熱かった。

熱かった。

胸が熱い。

いや、体全体が熱いのだが、特に体の中心部には火球が存在しているように熱い。

吐き出してしまわなければ死んでしまいそうだった。

胃の中の熱い物を。

伊藤は、自分の右手の中指と人差し指を、喉の奥に突っ込んでいた。

これが正しい方法か分からない。

ただ、それをしなければもう自分がこの熱に耐えられないという、根拠は思いつかないが実感があつたのだ。

「がああああああああああああああああああああ！」

獣が吼えるように、伊藤は叫んでいた。

何かが胃の奥から迫り出して来るのだが、それが伊藤の想像を遥かに超える熱量を持っていたのだ。

こんなモノを吐き出したら一体どうなってしまふのか

そついう不安が伊藤を貫いていた。

だが、もうそれは止まらない。

止められない。

次の瞬間。

人の形をした炎がそこに出現していた。

それは、数秒の間、水中に落ちたカナヅチの人間がもがくように、手をバタバタさせていたが、しばらくすると前のめりで倒れ。

そしてそのまま二度と動く事は無かった。

炎の人の話（後書き）

バイオキネシス
発火能力者の話を書きたかったのです。
ちよつと路線がズレました。
激しい頭痛の中書いてました。

夏のある日の話 前編

それは、とてもとても暑い日の事だった。

俺の名前は沢井俊夫、今年で16歳、高校2年生になる。

今はまさに夏休みの真っ只中で、中学時代こそ真面目に部活に打ち込んでいたもんだが、その反動か高校に入ってからはその物の面倒臭さが骨身に染みて、今は夏休みをコンビニのバイトか、学校の課題をやつつける以外は基本的に自由時間が与えられるお気楽な身分となっている。

受験でひいこら言うのは来年だし、今年からどんなに頑張ったとしても良い大学に入れる頭なんて残念ながら持ち合わせていない、せいぜいが3流と呼ばれるような大学に入ることになるだろう、もちろん受かったらの話だが。

だから、今年はゆっくりと高校生活最後の夏休みを満喫するつもりだった。

そんな暇な俺は、父親の兄の家、つまり叔父さんの家が老朽化したので、その建て直し工事をするというので、その家の荷物を建て直しの間の仮住まいに運ぶ手伝いに光栄にも指名されたのだった。

子供の頃から何度も遊びに行き、お年玉を貰っている身分では断れないし、断る理由も思いつかなかった、友達との遊びの予定でもあれば丁重にお断りするつもりだったのだが、そういう予定もたまたまその日は無かった。

まあ、たまには引越しの手伝いくらい無給でやってやろうじゃないかと、俺は父親と二人で、その家に向かったのだった。

と言っても、歩いても一時間かからずに行ける場所なのだが。

その時、まだ俺は、この後自分がどのような目に合うのなんて考えもしなかった。

あんな想像を絶するような、恐怖を味わう破目になるなんて。

汗が止め処なく流れてくる……

人の体のほとんどが水分で出来ているというのは、紛れも無い事実だとこの時ほど明確に理解できたことはない。

こういう事態を想定して、汚れても構わないシャツを着てきたのだが、もう汗を吸い込みすぎて濡れ雑巾のようになっていた。

普段、学校の体育以外でまともに運動をしていない身としては、炎天下での作業は過酷を極める、クーラーの利いた室内のコンビニのバイトとは大違いだった。

適度に水分を補給しているとはいえ、まるでゴビ砂漠を遭難しているかのように、飲んだ量の倍以上の水分が体から排出されているようだった。

この作業を甘く考えていたのを俺は後悔していた。

叔父さんの家から50mほどの場所が仮住まいで、建て直しが住むまでそこに住むというのだが、これがもう少し離れている場所ならば業者に頼むのだが、なまじ近い為に台車を借りて、タンスやらソファーやらをこつこつ運ぶ破目になっている訳だ。

さすがに一人ではないのが救いだ。

だが、60を過ぎている叔父さんには無理をさせられない、もう一人は俺の親父でこちらも足腰がしっかりしているとはいえ50の後半で、腕力に自信がない俺がこの作業の主力という予想外の出来事で、それでもひいひい言いながら俺は荷物を運んでいたのだった。実際に、タンスなどは引き出しの中身を出して、一段一段分解して運べば重さ自体はそれほどでもない、だがそれを何往復も繰り返し出すというのは拷問に近い、それに元々腕力に自身があるほうでもない。

先に大物の冷蔵庫やタンスの本体などの数人がかりじゃないと動かせない物を運び終えただけで、大人2人はもう自分の仕事は終わ

ったように休んでいるし、それに文句を言う訳にも行かずに俺は黙々とバイトよりも一生懸命に働きながら。

（こりゃ、どー考えても時給で計算すると間違いなく、いつものコンビニの830円よりは上だよなあ……）

と心の中でぼやいていた。

今日手伝つても、せいぜいが夕飯に何か外に食べに連れて行ってくれる程度だろう、というセコい事も考えてもいた。

そんな事を考えながらも、身内の手伝いと言う事で、しかもほとんど自分しか労働力の無いこの状況では、手を抜く事も出来ずに、ひたすらに荷物を運び続けていた。

日差しがじりじりと皮膚を焦がし、手の筋肉は突っ張り、足にはずっしりとした疲労感がまわりつき始めた頃、ようやく後2〜3往復するだけで荷物の全てが運び終わるまでになっていた。

「ふう……」

時間にして、もう二時間近く経過している、自分のペースで仕事をしている分、へんに張り切ったせいか体力がもうほとんど尽きかけていた。

それでもまた、中身のないタンスの引き出しを一つ、抱えて運んでいた、重さはそれほどではないのだが、単純作業を繰り返したツケが回ってきたのか、腕に痛みが走り始めていた。

（でも、あとちょっと……、あと少しで終わるんだ……）

そう考えて、もうさっきから何往復もしている引越し先の部屋に向かった。

そこはアパートとマンションの中間程度の建物に見えた。

それほど綺麗なわけではないが、家の建て直しの間だけの仮住まいならば充分だろう。

部屋の間取りは、2LDKで60過ぎの夫婦が住むには狭すぎるほどではないと思う。

日当たりはそれほど良くないし、若干汚れている感があるが、我

慢できないほどではないだろう。

確か、叔父さんが「近所の不動産屋に頼んだら格安で紹介してくれてねえ」と喜んで言っていたから、叔父さんたち夫婦は充分に満足しているのだろう。

さつきから何往復もしているが、その間に毎回鍵をかけていては面倒すぎるので、日本の治安の良さを信じて鍵は開けっ放しである。正直に言っと、盗られて困るような高価な代物は無い、例えば冷蔵庫にしても何年も前の物で使うのには支障は無いが、それを売ろうとするとかなりの安値になってしまいうだろうというような物ばかりだった。

叔父さんには、荷物を部屋に運んだら中にそのまま置きっぱなしにしてくれば、後はやるから。と言う事だったので、さつきからかなり乱雑に部屋の中に荷物が散らばっている、叔父さんと親父はそろそろ酒を飲み始めている頃だし、こりや後でおばさんが苦労するなあと思いながら、タンスの引き出しを部屋に置いて玄関から出る寸前。

唐突に背後から激しい音が響いてきたのだった。

どう考えても、部屋の外の音が部屋にまで響いてきたというよりも、部屋の中での音だった、何しろクーラーをつけているから窓は閉めているのだ。

それにしても今の音……、何かの事故という音とも違う。

さつきから何度も運んだ荷物が崩れた音とも違う、それに崩れるほど積み上げるような置き方はしていない。

それにしても今の音、それなりに重みがあるが、だが石のような堅さを持つ物ではない物を叩きつけたような……

例えるならば、ドロドロのセメントの入った袋を思いっきり叩きつけたような音に近い。

慎重に部屋に入って、その音の元を探ったのだが、まったく分かんかった。

侵入者の気配はまるで無い。

部屋には何の異常も無い。

きよろきよろと部屋を見渡すが、どこも変わったところは見当たらない。

それが逆に不気味な静寂を保っていた。

部屋は明かりが付けっぱなしにして、クーラーまで付けっぱなしの状態である。

全身を熱気が包んでいて、さっきまでは心地良いと思えたその冷気が、今はどこか不気味な感触のように思えた。

(……何の音だったんだろう?)

冷静に考えれば、本当にこの部屋の中から聞こえたのだろうか？聞き違いというのは無いかも知れないが、その音の出所を間違える事は良くある事だ、それに今は結構疲れているし、聴覚も当てにならないかもしれない。

そうやって、自分を納得させて、とつとと作業を終わらせようと玄関に向かった時。

ばむん！

さっきと同じような音がした。

はつきりと聞こえた。

嫌な音だった。

さっきよりも近くで聞こえたからだろう、今まで一度も聞いた事が無い音のはずなのに、吐き気を催すような音だった。

一体どうやったたらあんな音が出るのだろうか。

そして今の音、どう考えても押入れの中から響いてきた。

押入れの中はさっきから一度もいじっていない、それにわざわざ人の家の（まだ住んでいる訳じゃないけれど）押入れを覗く趣味は無い。

だが、今は事情が違う、この音の正体を確かめないといけない。案外、どこかから猫でも迷い込んでいて、それが押入れで暴れて

いるだけかもしれない。

そう思ったのだが、心の中では。

（猫がどうやって暴れたらあんな音がするんだよ……）

とも思っていた。

喉がからからに渴いていた、暑さで水分を失ったのもあるが、今は間違いなく緊張のせいだろう。

少なくとも今の自分には幾つか選択肢が有る。

一つ。

ここは自分の家じゃない訳だし、この音は聞かなかったことにして、さっさと残りの荷物を運び終えて休憩する。

これはかなり無責任だが、ある意味じゃ事なかれ主義の日本人らしい考え方かもしれない。

だが、夜中にこの音の正体が気になって寝付かれないかもしれない。

もう一つの選択肢はもちろん、勇気を出してこの音の正体を探るだ。

だが、何か、本能的な警報が鳴っているような気がしてならない。開けてはいけない、そう言われているような気がする。

好奇心は強い方だ、子供の頃から行った事の無い場所に行くとかわくする性格だったし、ホラー物の映画も色々と見ている。去年などは友達と幽霊が出るという廃墟に心靈写真を撮りにいったりもしている（その時は結局何も起こらなかったが）、そういう時とは異質の感覚がさっきから俺を包んでいるのを自覚している。

その葛藤を嘲笑うように、もう一度さっきと同じ音が確実に押入れの中から響いてきた。

真夏でクーラーが効いている部屋とはいえ、今の頬を伝っている汗は紛れも無く冷や汗だった。

唾を飲み込もうとしたが、唾液がまるで湧いてこず、軽い痛みだけが喉に走っていた。

猛烈に帰りたいかった。

だが、もう引き返す事は出来ない、このまま背を向けて部屋を出たら、永久にこの恐怖が付き纏ってくるようなそんな気さえする。

開けなければならぬ。

開けなければいけない。

それがまるで強迫観念のように働いていた。

「ちくしょう……」

誰にともなく俺は呟いた。

そして俺は、恐る恐る押入れの襖の取っ手に手を伸ばしていた。

果てしない時間が流れたように感じるが、ようやく手が取っ手に触れた。

次の瞬間、俺は意識を喪失していた。

まるで透明で、それなのに重苦しい液体に頭から放り込まれたような感覚が襲ってきたのだ、そしてそれは俺を包み込み、意識をどこかへと吹っ飛ばしていた。

まるでそれは暗い海にダイブしたようであり、また四方八方から真っ黒い風船に押し潰されていくような、そんな気分だった。

（気持ち悪い……）

重力の感覚も消えていた。

暗転

後編へ続く。

夏のある日の話 後編

完全に意識を失っていた俺、沢井俊夫さわいとしおが目を覚ました時、最初に目に映ったのは見慣れない天井だった。

天井があるということはここが屋内なんだろうな、という当たり前すぎる事しか分からない。

（どこだここは ）

分からない。

体を起こそうと試みたが、体がまるで動かない、だが縛られている訳でもない、ただ異常に全身が重く、そしてあちこちが痛むだけだ、ただ気を失って床に転がっただけにしては体中が痛い。

この体が動かない感覚は、中学の部活時代に始めての本格的な合宿を終えて家に帰った時、疲労のあまり家に帰ってすぐに床に転がっていたら体がこんなに重い感覚を味わった事があるが、それと似ている部分はあるがどうにも異質な感触だった。

頭にモヤがかかっているような、そんな気分だった。

体はまるで動かないが、視線だけはわずかに動かせる。

あの部屋だ。

僅かに見覚えのある部分がある。

先ほど俺が必死に運び入れた荷物は跡形も無いが、部屋の間取りや襖の色などを見る限り、あの部屋にいる事は分かった。

さつきから何回も出入りしているが、天井などわざわざ見上げないからすぐに気付かなかったのだ、それに頭も夜更かしをして睡眠時間が足りてない時のように妙にぼおつとして働いていない感覚がある、そのせいで本来ならばあそこで倒れたのだからあの部屋にいるかもしれないという考えが浮かばなかったのだろう。

だが、どうして俺は床に転がっているのだろうか？

まさか、あの時異常な恐怖に囚われて、あのまま失神してしまったのだろうか？

いくら怖かったとはいえ、歳は関係ないかもしれないが高校生二年生になる男の俺が、そう簡単に意識を失うだろうか？ 学校の体育で柔道をやった時に、柔道経験者なら手加減をしてくれるのだろうが、力自慢の柔道未経験者の同級生に思いつきり畳に叩きつけられて一瞬意識を失いかけた事はある、だがそれでも完全に気絶はしなかった、交通事故にでも遭わない限りそう簡単に人は気絶などするもんじゃない、何か普通とは違う力が働いたとしか思えなかった。また、そう思わないとなにやら自分の自尊心が傷ついてしまいうだった、いくら怖かったからと言って意識を失うなんて、友達に話したら間違いなく笑いモノにされるだろう。

それにしても体が動かない。

もしかして、これが金縛りというやつなのだろうか？

金縛り、前にテレビの特番で、あくまで心霊現象とは無関係の現象で、脳は眠っている状態なのに、肉体の感覚だけが残るとか、そんな今思い出しても良く分からない話をしていたと思う。

そういう番組でも、金縛りからどうやって抜け出したら良いのかという話はやっていなかった、次からは対処法も教えて欲しいものだ。

だが、このままここに転がっていたら、誰かが気付くだろうと俺は楽観的に考えた、これがもし人気の無い場所ならば、餓死の心配や、脱水の心配をしなければならぬが、とりあえずその心配はないだろう。

この時、俺はやはりまともに頭が働いていなかったのだ、部屋の中の様子が変わっていると言う事は、誰かが部屋に入ったかもしれないと言う事、そしてその部屋に入った人物は床に転がっている俺に対して何もしなかった、助ける事も、意識を確認する事も、誰かを呼ぶ事も……、そういう事をしないなんてありえるだろうか？ という事を俺は考えもしなかったのだ。

その時だった。

誰かが玄関の扉を開き、部屋に入ってくる音がした。

さっきまで僅かに視線しか動かせなかった首が動いて、その音の方に顔を向けた。

女の人だった。

年齢は二十歳を過ぎているだろうが、三十歳は過ぎていないように見える、何とか良く分からないが水商売風の派手な印象を受ける格好をしていた。

知らない人だった。

一体誰なのだろうか？ 自分が知らないだけで、叔父さんの知り合いという可能性はある、とりあえず誰にせよ自分を助けるか、あるいは助けを呼んでくれる可能性はある、それにこんな格好の人が泥棒だとは思えない。

だが、声を掛けようにも、俺の喉から漏れるのは声とは言い難い、ただの雑音だけだった。

それでも、その音はちゃんとその人の耳に入ったようで、その女の人はこちらに視線を向けた。

その眼は俺の想像していた目とはまるで違っていた、人が転がっているのを見たら、普通は驚く、その後は駆け寄ってくるか、助けを呼ぶかどちらかだろう。

その人の反応は、驚きではなかった。

ちゃんとそこに何がいるのかを理解していて、そしてなおかつそれに対しての激しい嫌悪感を隠そうともしない表情だった。

嫌な眼をしていた。

汚らしい汚物を見るような眼。

もしも、道に転がっている犬の糞をわざわざ凝視しなければいけないければ、人はこのような眼をするかもしれないといった視線だった。

俺は何かその眼を見ると、恐怖よりも不安感よりも、何故か哀しいという気持ちが湧き上がるのを感じていた、一体何故なのだろう。その人はこちらにわずかに眼を向けただけで、すぐに冷蔵庫に向

かった、足取りは急いでいるようには見えない、そして冷蔵庫から缶ジュースを取り出して、こちらを無視したままそれを飲み始めた。

冷蔵庫？ さっき三人でここに運び入れた時と配置が違う。

それに、あの時、運ぶのに邪魔だというので中身は全て外に出したはずだ、ジュースを入れておいた記憶は無い、それに冷蔵庫の電源プラグをコンセントに差し込んですらいなかった。

何だ？ 一体何が起きているんだ？

俺は動揺しながら、もう一度声を発しようとしたが、言葉は出ない、また雑音のような物が口から漏れた。

ガン！

女は苛立たしげに飲み干した缶を台所に叩きつけるように置いて、こちらを睨みつけた。

まるで長年の宿敵を見るような、そんな眼だった。

激しい憎悪がそこに込められていて、それを見るとまた何故か俺は哀しくて胸が痛んだ。

突然、女が何かを叫んだ。

だが、何と言っているのかまるで聞き取れなかった、大声の罵詈雑言うごんのような気がしたが、その言葉の意味を俺は聞き取れなかった、自分の知っている言葉とは違うような、そんな気がした、間違いなく話しているのは日本語のはずなのに。

次の瞬間、何かが自分に向けて飛んできていた。

飲み干したジュースの缶だった、女はそれを俺に向かって投げつけたのだ。

それが見事に俺の顔面を捉えていた、鼻が折れたような感覚だった。

強烈な痛みと、鼻血が溢れる感触がしたが、それでも体は動かない。

動かそうとすると体のあちこちに痛みが走るのだ、それもただの打撲という印象ではなく、少なくとも骨にまで達するような痛みが

四肢に走っている、だから体が動かないんだと分かった。

いつの間にか女はすぐ傍にまで近寄って来ていて、俺を見下ろしていた。

口元に嫌な形の笑みが浮かんでいた。

蹴った。

その女は何の躊躇も無く、俺の胴体を平然と、それもかなりの力を込めて蹴っていた。

強烈な吐き気が俺を襲う、しかも俺よりも小柄で細みな体に見えるのに、俺の体は平然と部屋の隅まで転がされていた。

あれ？

何か妙だ。

妙に体が軽い、それに……小さい？

俺は部屋の隅でも何度も蹴られた、その度に俺はもう痛みに対する反応を止めて、ただ衝撃に対して動く人形のようになっていた。

このままじゃ……

そう思った時、俺は体が浮き上がる感触を味わっていた。

女が俺の体を両手で持ち上げているのだ。

（やめてくれ……）

この女が何をしようとしているのか、それが俺には明確に分かった。

決して、何かの遊びで子供にするように”高い高い”をしている訳ではない、女は遊びではなく目的を持って俺の体を持ち上げている。

その目的は

（助けてくれ！）

言葉にならない叫びを喉の奥に生じながら、その願いは空しく女は俺の体を床に目掛けて叩きつけていた。

俺は床に叩きつけられ、そしてその衝撃でバウンドしていた。

信じられなかった。

俺の体重を持ち上げたのも信じられなかったが、人の体を手加減

抜きで床に叩きつけるといふ神経も信じられなかった。

もう痛みも何も無かった。

ただ、激しい絶望と、そして底なし沼のような恐怖が全身を支配していた。

「があっ！」

その瞬間に俺は眼を覚ましていた。

気が付くと、辺りにはあの女の姿は無く、自分が何度も荷物を運び入れた部屋に戻っていた。

体も自由に動く、痛みはどこにも無い。

ただ、異常な汗を掻いていた、決して健康的な運動では掻かない種類の粘ついた汗だった。

俺はさっきまでのあの体験が夢だとはとても思えなかった、荒い息は数秒経つてもまるで収まる気配はない。

体が小刻みに震えている。

当然だ、夢にしても、あれほどの悪夢を見た経験は無い、自分ももう少し子供の時に同じ体験していたら、間違いなくズボンを汚す結果となっていただろう。

その時だった。

いきなり玄関の扉が開かれたのだ。

「うわあっ！」

俺は思わず叫んでしまっていた。

玄関には驚いた表情の叔父さんの奥さんが立っていた。

「ちよつと、どうしたの？ そんな驚いた顔して」

確かに俺の顔は恐怖のあまり引き攣っていた。

「いっいえ、その、ちよつと……吃驚^{ビックリ}しちゃって……」

「驚かしてゴメンなさい。でも、今日はありがとうね、俊夫君のお陰で助かったわ」

俺はこういう何気ない会話ですら、さっきの恐怖体験で体が凍り付いてしまっている体を解凍してくれるようで嬉しかった。

「もう、後は叔父さんにやらせるから、俊夫君は向こうでお父さんと休んでいて良いのよ」

お婆さんの優しさが染み渡るように感じた。

俺は、震え出しそうな体をどうにか持ち上げて、玄関に向かった。正直言つと、もう一人でこの家に入るのは願い下げだった、また荷物を運べと言われたら、高校生で恥ずかしいという気持ちを殺して父親を無理にでも引っ張ってこようと覚悟していたくらいだ。

「あ」

玄関に行き、靴を履いていた俺にお婆さんは。

「そうだ、スイカを冷やしてたんだっただ、これ持って行ってくれない？ 向こうで切って皆で食べようね」

「あ、はい」

お婆さんは冷蔵庫からスイカを取り出して、それを俺に渡した。ずっしりとしたスイカだった。

手から冷気が伝わるほど良く冷えている。

「落としちゃ駄目よ」

お婆さんは笑いながらそう言った。

腕がかなり酷使したせいで重いが、スイカの一つや二つくらいならまだ運べる。

「それじゃ、先行つてますから」

そう言つて、俺は数歩歩いた所で一つの疑問に直面していた。

冷蔵庫？

電源も入れてなかったのに……

そう思った瞬間、手のスイカの感触が硬いものからゴムのように柔らかい物へと変わっていた。

まるで巨大な芋虫を手で抱きかかえているような、全身に鳥肌が浮かび上がるような感触だった。

俺は悲鳴を上げて、その時にはもうスイカを地面に落としてしま

っていた。

それとほぼ同時に、背後の部屋からけたたましい笑い声と、部屋のあちこちを何かで殴打しているような、そんな音が何度も何度も何度も響いてきた。

俺は言葉を失っていた。

本当ならば、俺は一目散に恥も外聞も無く走り出してしまつてころだったのだが、俺はその部屋から響いてくる怪異よりも切羽詰った状況に陥っていた。

地面に落としたモノと眼が合ってしまったからだった。

スイカは完全に別のものへと変貌していた。

それは、かつて人であったモノだ、顔中、体中にアザどころではない怪我をして、骨が見えている部分すらもある、そして異常なほど痩せていて、骨と皮しかなかった。

産まれたばかりの胎児が、体の大きさだけ小学生くらいになったような、そんな不気味なモノが地面に転がっているのだ。

それなのに、眼だけはしっかりと俺を見据えていて、何か言いたげな表情で、プルプルと震える手が俺のズボンの裾を細い指先で掴んでいた。

その瞬間に俺は全てを放り出して逃げた。

これまで生きてきた人生の中で最大級の恐怖が俺を貫いていた。

これから先、どのように生きて行ったとしても、これ以上の恐怖は味わえないだろうという確信があった。

その地面のモノは、唇を小さく動かして。

「落としちゃ駄目って言ったじゃないか……」

そう言った。

俺の精神が耐えられたのはここまでだった。

その後、俺が帰らないのを不審に思った父と叔父が、階段の所
に腰をかけるようにして意識を失っている俺を発見したのだった。

熱中症だろうという事で話は落ち着いたが、俺はそれが熱中症に
よる幻覚ではないと確信を持っていた、だがそれと同時にそんな事
を言っても誰も信じないという考えもあり、そのことは誰にも言わ
ずじまいだった。

後で聞いたのだが、あの部屋の以前の住人は母子家庭で、母親は
小学生3年生の息子に虐待を続けていたという、そして息子をつい
に殺してしまった後、あの部屋で自らの命も絶ったそうだが、近所に
住んでいる叔父さん夫婦は間違いなくこの事件を知っていたはずな
のに、この部屋に住めるその寛容さには敬服するしかない、元から
幽霊とかそういう類をまったく信じていない夫婦なのだ。

だが、俺はあまり安い物件には気をつけたいと心から思った。

きつと、あの部屋では何かを叩きつけるような音が響いているの
だろう、今でもまだ。

少なくとも仮住まいの間、俺が遊びに行く事は死んでも無いと断
言出来る。

とりあえず俺は、引越しのアルバイトを今後一切しないと心に決
めた。

理由は二つ、一つは仕事が過酷だから。

そしてもう一つは、何が部屋で何が待っているか分からないから
だ。

完

呻き声の話

夜である。

25歳フリーターの岡田大吾^{おかだだいご}は、暗闇の中、静かに目を開けていた。

時間は深夜零時過ぎ、現代社会においてこの時間帯というのは、必ずしも誰もが床に入る時間ではない、大吾も明日が休日であれば、朝方まで起きてネットを見ていたり、やりかけのゲームをしていたりする時間である。

だが、明日は朝早くから始まるバイトが入っている、その為の大吾は今日は特別に生真面目に23時にはもう布団に入り、眠りに入りかけていたのである。

何しろ、そのバイト先には、歳は30過ぎでやたらと口うるさい男の先輩がいる、ちょっと遅刻したり、誰でもするような仕方の無いミスで、とにかく物凄く怒られる、それも人の今後のためにあえて厳しく怒る、というのとはまったく別で、自分の鬱憤を晴らす為だけのよう怒る、最終的にはミスとは関係ない事で怒るのである、それで辞めてしまった者も多い。

大吾の働くバイト先では、フリーターではあるが古株なのでかなりの発言力を持っているのだが、やはり30過ぎでフリーターというものはそれなりにストレスが溜まる物なのかもしれないが、それを他人で発散するのは止めて欲しかった。

どういう訳か先日、その先輩がこの家までやってきた事は思い出したくも無い……

だから早めに眠ろうとしていたのだ、それなのに、深い場所から静かに引きずりだされるように、大吾の意識はゆっくりと覚醒し始めたのである。

一体何故なのか。

尿意を催した訳ではない、幼稚園児ではないのだからそれならばすぐに分かる。

たまに、朝早く起きるといふプレッシャーから、起きる時間よりも1時間くらい前に目が覚める時は有る、もちろん、それが眠って一時間しか経っていない時でも、絶対に無いとは言いきれない。

だが

何か奇妙だった。

どこことなく腑に落ちないのである。

異様な事が起こっているのに、それにまったく気が付いていないような、自分の知らぬうちに何かが起こっているような、そんな胸騒ぎに似た物を感じるのである。

大吾は1Kの安アパートで一人暮らしをしている、男の一人暮らしであり、元々几帳面な性格ではない為、部屋の中は適度に汚れている、だがそれでも大吾にとっては部屋の隅から隅まで目が行き届いている空間である、それなのに、今日に限って言えばどこことなく妙な気分だった。

（気のせいかな……？）

違和感。大吾はそう呼んでも言い物を感じているのだが、わざわざ電気をつけてまで、部屋の中を調べる気は無い、布団から一度出たら今は半分ほど覚醒し、半分はまだ眠気を感じている状態なのが、完全に目覚めてしまうからだ、そうしたらまた眠りに落ちるまでにかなりの時間を要する事になってしまう。

それに泥棒が部屋には入って来ているとか、そういう人が部屋にいる気配ではない、そもそもこんな部屋に誰が忍び込んで来ると言うのか、どう鼻屑目に見たって金があるようには見えない、泥棒が入ったとしても申し訳なくて逆に金を置いて行ってしまうような、そんな部屋である。

結局、大吾は自分の思い過ごしと言う事で、頭の中でまとめて、再び布団を頭から被り眠ろうとした。

その時だった。

大吾の耳に声が届いてきたのである。
それは、はつきりとした声ではない。

まるで風邪で喉がやられている時に、無理に出したような声に聞こえた、掠れた呻き声である。

一体どこからするのか。

隣の部屋？

いや、違う、そういう感じではない、それに壁が薄いから隣が帰ってきているかどうかすぐ分かる、大吾の部屋は一番端なので、隣の部屋は一つである、それにそもそもこの声の感じからして、壁とかそういう物を隔てて聞こえてくる音ではないように感じる。

あえて言うならば。

この『部屋の中』の、どこから聞こえてくる声のような

大吾は思わず、息を呑んだ。

誰かがこの部屋にいる！？

いや、だが誰かが隠られるほど広さがあるわけではない、押入れの中とか、そこから聞こえてくる感じでもない、だが間違いなく部屋の中から声がするのである。

思わず、大吾は起きて灯りを点けた。

そして部屋を見渡したのだが、どこにも異常は無い、だが声は聞こえてくる。

隙間風？ 機械の駆動音？ 家鳴り？ どれも断言は出来ないが、

違う気がしてならない、もっとそういう種類とは違う物のような気がする。

じゃあ、何なのか？

大吾は恐慌状態パニックに陥る寸前だった。

元々が気が小さい、物陰から急に何かが飛び出してきたら、女のような悲鳴を上げてしまう性格なのである、中学校時代に友達とお化け屋敷に行った時は失神してしまい、お化けに介抱される始末だ

った。

そんな大吾だから、もうこの部屋で朝まで眠るという選択肢を選ぶ事は出来なかった。

「で、呼んだ訳？」

場所はファミレスである。

名前を聞けば誰もが知っているし、大抵の街に探せば一軒はある、そういう店に二人の男が向き合って座っている、一人はたった今恐怖の呻き声のせいで、部屋から転げるようにして逃げてきた男、岡田大吾である。

向き合って座っているのは、線が細い印象を受ける男であるが、その目付きは岡田には有る甘さというか、そういう物が無い、強引な押し売りや宗教の勧誘でも平気で断れそうな、そんな意志の強さが窺えた。

その声から感じるのは、苛立ちと怒りである。

「あ、ああ……」

大吾の声には力が無い。

さすがに、こんな時間に突然、携帯で友達を呼びつけた事に対しての、引け目を感じているようだった。

「こんな時間に……、あのな、俺とお前は小学校以来の親友だよ、これは間違いない、お前が事故ったりしたら、こんな時間だろうとどんな時間だろうと、すぐに駆けつけるさ、でもな、だからと言って零時過ぎにいきなり呼びつけられて、慌てて来てみたら、その理由が部屋で『変な声がする』じゃ、誰だって怒るさ、家が近くても関係無くな」

かなりの正論を一気に言っていた。

この男の名前は真壁駿まかべしゅんという。

大学を卒業し、今は一部上場企業に就職をしている、もちろん明日は平日なので仕事は有る、それでも友達からの電話一本で駆けつ

ける辺りは、かなり友達思いというか、面倒見が良い性格なのだろう。

だが、それでもやはり怒りは見せている。

真壁は、注文したロイヤルミルクティーを飲んでいるが、かなり砂糖を入れているのに、まるで苦い物でも飲み込んでいるような表情を浮かべている。

「悪かったよ、でもさ、頼れるの、お前しかいないし……」

大吾は消え入りそうな声で言った。

本当に心の底から申し訳ないと思っている口調である、それを見て、真壁はため息を吐くと上着とレシートを手に無言で立ち上がっていた。

「あ……」

大吾はまるで捨てられた子犬のような目をした、全てに見放されたようなそんな眼である。

もつとも頼りにしていた相手が、怒って立ち上がった、もう自分には頼るべき相手がいない、そんな絶望感が漂っていた。

「おい、行くぞ」

「……行く？」

「お前の家だろうが、とつとと行って、さつさと疑問を解消すれば良いんだろ、こつちも朝早いんだから」

「本当か！？　ありがとう！」

大吾は本当に嬉しそうな表情をしていた。

真壁はやれやれと言った雰囲気で、それでもやはり長い付き合いの友達は見捨てられず、速く大吾の不安を取り除いて、そして帰るそう決めたようだった。

誰もが出来る事ではない、大抵は怒りを呼びつけた相手にぶつけて、そのまま絶交になるか、あるいは上辺だけの心配をして、気のせいだよと諭すか、もしくは電話で呼び出されても出ないか、あるいは来ないか、まあこの位だろう。

「じゃ、行こうか」

真壁は、頼りがいの有る声でそう言った。

大吾は、自分と同一年のこの男が、世界中の誰よりも頼もしい人間であると確信していた。

部屋に着くと、呻き声は聞こえない。

大吾は、また申し訳無さそうな顔をした、怪異が起こっていない事は喜ばしい限りだが、気のせいの類で真壁を呼びつけてしまったのだとしたら心苦しい。そういう矛盾にも似た苦悩を味わっているのである。

「音は、今はしないか？」

「あ、ああ……」

か細い消え入りそうな声で大吾はそう言った。

「そうか、とりあえず上がらせてもらう」

だが、真壁はほとんど気に留めていないようだった。

「どうぞ、適当に座ってくれよ」

そう言いながら、大吾は真壁を部屋に招き入れた、先ほどまではとても落ち着ける空間ではなかったのに、真壁が一緒というだけでこれほど違う物に感じられるのか、と大吾は思っていた。

真壁は静かに部屋に入り、そして部屋を見渡した。

小学校の時から腐れ縁の大吾の事は、真壁は良く理解している、温厚、小心、生真面目、はつきり言っどこにでもいる性格である、だが人を裏切ったり傷つけたりするのを極端に嫌う性分と、その根っこに有る優しさには時折真壁も助けられている、だからこそ真壁は自分が大吾を支えているのではなく、持ちつ持たれつの関係であると思っている、だからこそ深夜に急に呼ばれても駆けつけるし、こんな誰も相手にしないような話にも付き合う、逆に真壁が深夜に急に呼び出したら、この大吾も同じように駆けつけるだろうという確信も有る。

真壁は、元々、大吾の言う『呻き声』というのが、大吾の錯覚の

類であると思っていた。それが大吾の精神的なストレスな心因的なものからの来るのか、あるいは実際に部屋のどこから何かの音が聞こえてきて、それに過剰に反応している、それだけの話だと思っていた。

なにしろ、会う度に今のバイト先の先輩に対する愚痴ばかりを溢していた、他人に対してそれほど悪意を持たないこの男にこれほど言われるとは一体どういう人間がいるのかと興味を持ったくらいである。

恐らくそれが原因の幻聴なのではないだろうか、と真壁は思った。それを丁寧に説明してやり、落ち着かせてやれば自分の仕事は終わりだ、そう考えていた。

だが

それは部屋に入るまでは、である。

「……」

真壁の表情は固まっている。

部屋に一步入った時から、立ったまま動かない。

「なあ、何か変な感じしないか？」

「あ、ああ、そうだな……」

先ほどとは打って変わって、真壁の口調には歯切れが悪い、それでもようやくもう一步、二歩部屋に足を踏み入れ、散らかった床にゆっくりと腰を下ろした。

「一つ聞きたいんだが、お前がおかしいと思っているのは、『呻き声』がするって事だったよな？」

「ああ……、今から考えたら何日か前から、そんな声が聞こえていたような気がする、ずっと気のせいだと思い続けていたんだと思う」「そうか……、とりあえず寝ろよ」

「え？」

「俺が傍にいて、また『呻き声』がしたら声を掛けてくれ、俺が近くにいたら安心して寝られるだろう？」

真壁の声にはどこか人を安心させる作用がある、大吾は常々そう

思っていた。まるで子供をあやすように真壁にそう言われても悪い気分がまったくしないのが不思議だった。

「でも、お前は明日会社があるだろう？」

「そうだな、まあ、普段は滅多に有給は使っていないし、最悪休めば良いさ」

大吾は感激したような顔つきになっていた、いや実際に深い感激をしているのである。

自分のためにこれほどしてくれる友人はいるだろうか？ 居るのなら、絶対にそういう友人を大事にすべきである、酒を飲みながらじゃないと会話が出来ないような相手、いつも上辺だけの会話で同じような話ばかりをして相手の内面にまったく触れない、そんな関係は本当の意味では友人ではない、大吾はそう確信した。

「悪いな、本当に。今度なんか奢るよ」

「良いから横になれよ、耳栓があるならそれをするの良い」

「ああ、お言葉に甘えて眠らせてもらうよ」

そう言って、大吾は真壁の言う通りに、耳栓を両耳に詰めて、そして布団に潜り込んだ。

数分後。

大吾は、近くに人が、それも自分の為にわざわざ会社を休んでくれるとまで言ってくれた親友がいるという安心感からか、すぐに眠りに落ちていた。

真壁はそれを静かに見詰めている。

その眼は、友人を見るというよりも、何かを観察しているように見えた。

そう、確かに真壁は観察していた、肺の動き、胸の上下する間隔、呼吸を吸い込む音、つまり大吾が本当に寝入ったのか、それともまだ眠っていない意識がある状態なのか、それを冷静に見極めているのである。

何故か。

とりあえず、真壁は大吾が完全に眠った事を確認すると、すぐ傍の押入れに向かった。

何しろ、今の真壁には『そこ』から『呻き声』が聞こえているのであった、くぐもったような声、明らかにそれは人の声に聞こえた。自分の動きで、大吾が眼を覚まさないように、かなり慎重に動いている。

そして、ゆつくりと、その押入れの襖を開けた。

そこには

男が一人転がっていた。

それを見た直後、真壁はすぐに大吾の家を出て、携帯電話で警察に連絡を入れた。

そして約15分後、警察がやってきて、眠っていた大吾を起こし、そして逮捕したのだった。

真壁がその家に入って、すぐに感じたのはその『呻き声』では無く、明らかな異臭であった。

何かが腐ったような悪臭、人の糞便やら、何やらが混ざり合ったような、嗅いだけで吐き気を催す、そんな臭いである。

だから部屋に入ってすぐに尋ねたのである「異常なのは呻き声の事なのか」と。

確かに部屋が汚い人間は、自分の部屋が臭ってもそれに頓着しない場合も有る、嗅覚が麻痺してしまうのだろう、だがこの部屋の臭いはそんなレベルの物ではなかった。

だから、真壁はすぐに異常なのはこの部屋ではなく、長年の親友であるはずの『岡田大吾自身』なのだ気が付いた。

その為、大吾を安心させ眠らせて、その間に部屋を探ろうとしたのだ、そして予想通りというか何というか、押入れに一人の男を発

見したのである。

その男は、大吾の通うバイト先の先輩であつた。

どういう理由か知らないが、大吾の家に押しかけて、そこで何かの揉め事が有つたのだらう、その際に大吾がその先輩の自由を奪い、押入れに放り込んだのだらう、大の大人だらうと一対一であれば隙があればいくらでも昏倒させることは出来るし、自由を奪うにも家の中を少し探せばいくらでも道具は有る、先輩はこの押入れで糞便を垂れ流し続けていた、大吾はそれでもそれを忘れてしまいたい一心で無意識的にそれを頭の外に除外していたのだらう。

それでも、罪悪感との闘^{せめ}ぎ合いやら、良心の呵責^{せめ}やらが『呻き声』となつて大吾に聞こえていたのかもしれない、そしてとうとう真壁に電話をして助けを呼んだのだらう。

あくまで全て推察の域を出ない話である。

そしてもう一つ、付け加えるのなら奇妙な事が有る。

それは、警察が駆けつけて、その先輩を発見した時、その時にはもう既に先輩は死亡してから三日は間違いなく経過していたという。良く考えれば、大吾が先輩を殺して、そして押入れに放り込んで隠したと考える方がどこか筋が通っている気がする、ただ相手を気絶させてそして押入れに入れっぱなしにしておくよりは、少しは、という意味である。

どちらにせよ、その時に何が起こつたのか、それは大吾自身も完全に記憶を失っているそうなので、後で聞いても分からない、殺人なのか、それとも偶然が産んだ事故だったのか、それすらも分からないのである。

こうして、どうにも釈然とせず、後味の悪さだけが残る事件が幕を下ろした事になる。

それにしても、死後三日も経過しているとするならば、真壁が聞いた『呻き声』は一体なんだったのだらうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4305b/>

現代怪奇異聞録

2010年10月8日14時15分発行